よくある元ブラックサークルもの

ナップル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高い代償を払ってキタサンとサトイモ完凸したので投稿。

もっとウマ娘のＳＳが読みたいゾ

目　次

『全員、整列!!』 1
『よし、保健室』 6
『人間には興味はないが』 14
『肌アレ治った・・・』 18
『よくサポーターとして世話になったものだ』 25
『踊るくらいなら』 33
『走りながらでも考えることはできます』 40
『幼稚園のお遊戯を見ている方が有意義ですわ』 47
『すべてあなたの自由なのに』 55
『スキンケアは欠かしていませんから』 67
『証拠なんていりません』 75

『全員、整列!!』

『ブラックサークル』

その名前がワイドショーで取り上げられるようになってからしばらく経った。
きっかけは、歴史的な名馬の血統。
誰からも期待され、勝つことだけを願われたウマ娘がいた。
その期待に応えるように、少女は走った。
デビューから常に無敗だった。
勝つことが当然。
２位以下はすべて価値がない。
そう教えこまれてきた。
事件が起きたのは、無敗で勝ち続け、皐月賞、日本ダービーを制し、クラシック三冠にまで手が届きかけた菊花賞当日。
彼女は、トレーナーからの教えを忠実に守り、走りぬいた。
しかしその前に、別の天才が立ちはだかった。
開幕からペースなど考えていないかのように颯爽と駆けた。
観客はみな、どうせすぐに力尽きるだろうと思った。
追う彼女もそう思った。
崩れなかった。
独走を続け、苦しさに顔を歪めながらも、それでも楽しそうに天才は走った。
結果として、誰にも前を譲ることなくゴールラインを切った。
彼女は２着だった。
観客はみんな、無敗の三冠王が誕生しなかったことを残念に思いながらも、彼女の健闘を讃えた。
「よくやった。」
「すごい追い上げだった。」
「次も応援してるよ。」
そんな暖かい声援も、彼女には届かなかった。

２着なんてゴミだと、生きている価値はないのだと、それがトレーナーの口癖だった。
怖い。
今まで１着を取れなかったチームメイトたちが、どのように扱われてきたのかを思い出した。
控室に戻って、トレーナーにあったらなにをされるだろう。
辛い練習に耐えかねて自殺未遂をしたウマ娘がいた。
竹刀で腱を切られたウマ娘がいた。
飯を抜かれ何日も閉じ込められたウマ娘がいた。
それを冷たい目で見ていた自分がいた。
トップを取れないのが悪いのだと、そう教えこまれていたから。
それが、自分の身に起きてしまった。
ゆっくりと、重い足取りで控室に戻る彼女の前に、その男はいた。
彼女のトレーナーだった。
歪んだ笑みを浮かべ、右手にはおなじみの竹刀を握りしめ、何か言った。
その言葉を聞いて、少女は狂ったように泣き叫び、その場で気絶した。
何事かと騒然となる会場。
スタッフは彼女に駆け寄り、医務室に運ぶ。
新たな天才の出現もなかったかのように慌ただしく世間は動いた。
自他共に認める業界トップサークル、その実態は・・・
スパルタを通り越し、拷問に近いトレーニングにより、ウマ娘を恐怖による統治でもって支配する、旧態然としたサークルであった。
誰かがいった。
まるでブラック企業のようなサークルだと。
それからウマ娘に辛く当たるサークルのことをブラックサークルと呼ぶようになる。
結果として、世に隠れていたブラックサークルはマスコミの追求によりいくつも表に出ることとなった。
ウマ娘の人権を守るようにといくつも決まりができた。

それが、1年前の話。

◇　◇　◇　◇

その部屋の中は、一言で言えば地獄だった。
何日も寝ていないような深いクマをつけ、うつろな目で上を見上げる子。
痛みに震える足で、筋トレを続ける子。
ストレスから食べることをやめ、極限までやせ細った子。
逆に食べることに強迫観念を植え付けられ、限界を越えて食べ続ける子もいる。
「ひぃ・・・・トレーナー・・・ぶたないでください・・・
ちゃんと言うこと聞きますから・・・」
「もっと、もっと鍛えないと、早く走れないんだ！」
「痛い、足が痛いよぉ・・・・」
あちこちから聞こえてくる悲鳴のような声。
ここは一体、どこの精神病棟なのかと我がサークルのことながら思う。
もうトレーナーが捕まって1年も経つのに、誰一人として立ち直ることはなかった。
かく言う自分も、正気を保っていられる自信はない。
出るレースもないのに、ただ部屋の中にあるランニングマシーンで延々と走り続ける毎日。
変わらない薄暗い部屋の中、それだけが自分に残された日課だった。
「ふっ、ふっ、はぁ、ふっ、ふっ、はぁ」
毎日続けていた甲斐があってか、かつてはマイルから中距離向け

だった足も、今ではすっかり長距離向けになってしまった。
今ではあのころのように爆発力のある走りはできないだろう。
こんなに練習して、一体なにになるというのか。
自問自答しながら、それでもただただ走り続ける。
それがウマ娘の本能なのだと思った。
「はあ・・・・・そういえば、今日だったっけ。
新しいトレーナーが来るって言ってたの」
1年前、ウマ娘に対する虐待が世間に広まり、トレーナーが懲戒免職となってから何人かのトレーナーと、カウンセラーが出たり入ったりを繰り返した。
結果は見ての通りである。
きっと誰が来たって何も変わらない。
期待なんて疾うに忘れ、諦めに満ちた思いで足を動かし続けた。

コンコン、と入り口の扉をノックする音が室内に響いた。
その音だけで恐怖しちぢこまってしまうウマ娘も中にはいる。
ゆっくりと、扉が開いた。
「こちらです、トレーナーさん」
「案内ありがとう」
扉を開いたのは駿川たづなさんだった。
理事長秘書を務める傍ら、ウマ娘のサポートも行ってくれているので顔なじみである。
一緒にいる男性は見覚えがない。
おそらく、この人が新しいトレーナーだろう。
長身痩躯。
まるで競争ウマ娘のように鍛えられた肉体。
鋭い眼光と、短く切りそろえられた髪。
自然と、目を惹きつけられた。
「おっ、今度は誰だ・・・この地獄の果てみたいなサークルにわざわざ来たトレーナーはよぉ」
絡むような口調で話しかけたのはウオッカだ。

彼女は1年前、トレーナーがいなくなってから、新しく来るトレーナーに対し辛くあたった。
まるで、今までのお返しをするかのように。
ウマ娘は、基本的に一般男性よりも膂力が強い。
全力で走れば自動車にも負けないし、その脚力で蹴られればひとたまりもない。
それゆえ、剣呑なウマ娘を前に多くのトレーナーが怯むこととなった。
しかし、今回のトレーナーは怯まなかった。
強い視線でウオッカを睨み返すと、ふとつぶやいた。
「これが地獄の果てか・・・・面白い」
そう鼻で笑うと、大きな声で言った。

「全員、整列!!」

『よし、保健室』

よく響く声だった。
狭く、薄暗い室内がびりびりと震えた。
思わず背筋が伸びる。
「聞こえなかったか？整列だ！」
「は、はい！」
怒気をはらんだような声に、誰もが慌ててトレーナーの前に並んだ。
先ほど絡んでいたウオッカですら同様だった。
「整列までに３０秒か・・・だいぶたるんでいるようだな。
まあいい、今日は初日だ。大目に見てやる。」
高圧的な口調だ。
この１年間に出入りしていたトレーナーやカウンセラーは、虐待のあったウマ娘に対し極力優しく接するように配慮していたように思う。
心が疲弊した者に対して、当然の対応だ。
それが、このトレーナーには感じられない。
冷たく射貫くような視線は、かつてのトレーナーと、スタッフたちを思い出させた。
咳ばらいを一つして、トレーナーは話し始めた。
「今日からこのサークル【アケルナル】に配属されたトレーナーだ。
灰家　欽舎という。覚えておけ。
俺は君たちと仲良くする気はない。
メンタルケアも必要以上に行うつもりもない。
俺ができるのは、ただ君たちを速く走れるようにすることだけだ。
そのためだけに、ここに来た。」
言い切られた。
速く走るためだけに存在した昔を想起させる発言だ。
体に恐怖が走る。
心が絶望に歪みそうになる。

また、あのときの再来か。
なぜトレセン学園はこの男を我がサークルに配属したのか。
一年経っても誰一人として立ち直らないこのサークルも、ついに見捨てられてのかもしれない。
だとすれば、つまり、この重科トレーナーは・・・・引導を渡しにきたのだ。
「よし、まずは各員の状態の確認からだな。
まずはウオッカ」
「お、おう」
「ふむ・・・・
バ場適正　芝Ａ、ダートＧ
距離適正　短距離Ｆ、マイルＡ、中距離Ａ、長距離Ｆ
脚質適正　逃げＣ、先行Ｂ、差しＡ、追い込みＦ
スピードとパワーにトレーニング適正があるな。
スキルはまだ獲得していないが、差し向けのものだろう。
本来の好戦的な性格と適性がマッチしている。
しかししばらく筋トレに励んでいたせいで、トモの張りが不自然だな。
極めつけは練習ベタだな。
これじゃいくら練習しても失敗続きだったはずだぞ。
よし、保健室」
「・・・・・は？」

まくしたてるように、トレーナーは言い放った。
言葉の半分も理解できたウマ娘はいなかっただろう。
ウマ娘にはそれぞれ個性があり、向き不向きがある。
それを適正と人は言う。
情報誌には数値やアルファベットで評価していることもあるにはある。
しかし、ウオッカはまだデビュー前なのだ。
公式のレースに出ていない状態で、判断する材料に圧倒的に欠けて

いる。
トレーニングの状況や性格などはトレセン学園にも情報があるだろうが・・・
混乱する私達を置いてきぼりに、トレーナーの話は進んだ。
「ナイスネイチャ」
「・・・はい」
「ふむ・・・・
バ場適正　芝Ａ、ダートＧ
距離適性　短距離Ｇ、マイルＣ、中距離Ａ、長距離Ａ
脚質適正　逃げＦ、先行Ｂ、差しＡ、追い込みＤ
パワーと賢さにトレーニング適正があるようだ。
軽いように見えて本心は強い負けず嫌い。
お前も差し向けのスキルを持っていそうだ。
中～長距離を主体として、スタミナとパワーを鍛えろ。
あとはこの暗い部屋でもよく分かる肌アレ具合だ。
スキンケアくらいしろ。
よし、保健室」
「な、な、なんですって・・・・!!」
「次はオグリキャップ・・・」
変わらず、トレーナーは続けた。
トレセン学園の資料を読み込むどころではない。
一体、どこからこの情報を得てきたというのか。
適当なことを並べ立てたと見ることもできる。
できるが、そう判断するにはそれぞれの評価に確かにと頷いてしまうものがあった。
しかし、練習ベタと肌アレでなぜ保健室へ・・・？
結局、すべてのウマ娘に最後に「保健室へ行け」と締めくくって、トレーナーは当たりを見渡した。
「む・・・あとは、トウカイテイオーがいるはずだが。
どこにいるかわかるものはいるか？」

「トウカイテイオーは・・・奥の部屋のベッドで寝ています。
1年前のレースで骨折した上、最も信頼していたトレーナーと別れて、この中で一番立ち直ることがむずかしいと言われています」
「その話は当然知っている。
しかし、俺がトレーナーをする以上、走ってもらう。
骨が折れていても、心が折れていても関係はない。」
そう言って、トレーナーは奥の部屋にずんずんと歩いて行った。
「君たちはとっとと保健室へ行くんだ。
本格的な練習は、まずそのコンディションを直してからとする」
「いえ、しかし・・・」
「何度も言わせるな」
にべもない。
しかし、このままトウカイテイオーとふたりきりで会わせては、彼女の心が決定的に壊れてしまう可能性がある。
私達はトレーナーを追うように、テイオーのいる部屋へと向かった。

「結局ついてくるのか。まあいい。
しかし、何があっても口を挟むなよ」
トレーナーは、部屋の扉をノックした。
「トウカイテイオー、いるか。
俺は新しくこのサークルのトレーナーになった男だ」
返事はない。
普段、私達がいくら声をかけても返事をしないのだ。
いままで入れ替わってきたトレーナーやカウンセラーでも同じだった。
「だんまりか。
こちらも仕事なんでな、入らせてもらうぞ」
ためらうことなく、灰家トレーナーは扉を開いた。
中はまるで病室のように何もなく、殺風景だった。
隅に置かれたパイプベッドには、小さい体を横にしているテイオー

がいた。
私達も、彼女の姿を見るのは久しぶりだった。
これが、あのテイオーか。
デビューから連戦連勝を重ね、その走りは見るものを魅了した。
力強さと、その躍動感で会場を圧倒した存在感が、今は見る影もない。
「なるほど、まったく聞いていた通りだ。
散々しごかれたトレーナーに盲目的に心酔して、一度の負けですべてを失ったウマ娘。
かつて世間を騒がせた最強の血統も、こうなっては逆に惨めだな」
「な・・・!!」
開口一番のせりふが、慰める言葉ではなくそれか。
死人に鞭を打つような態度だ。
さすがに咎めようと、口を開こうとした。
ダン!!
トレーナーは、思い切り床を足で叩き、それを制止した。
黙っていろと、そう聞こえた。
「しかし、全く見る目のないトレーナーだな。
この素質に対し、ただスピードとパワーを鍛えるだけ。
作戦は差しか追い込みだと・・・？
スピードに自信があるからと、マイルの距離への出走経験もある。
ここまで来ると逆に笑いがこみあげてくるな」
そういうトレーナーの表情は一切笑ってなどいない。
むしろ怒りを我慢するかのように、口端を歪めていた。
「なんて悲劇だろうな。
この素質があれば、凡人がなにも考えずに育てても賞を量産する化け物になっただろう。
それをなまじ酷使した結果、心も体もぼろぼろか。
救いがたいトレーナーだ。
存在すること自体が有害だ」
「・・・や・・・めろ・・・・」

「君だけじゃない、このサークルすべてのウマ娘に言えることだ。
これだけの素質を集めて、誰一人として開花していない。
わざと潰しているのかと問い詰めたいくらいだ。」
「やめろ・・・・」
「いや、素質があるがゆえだろうな。
本来の適正とは違う育成をされても、それでも結果を出してきてしまった。
これが悲劇でなくてなんだ。」
「やめろ!!!」
トウカイテイオーが、口を開いた。
何ヶ月ぶりだろう。
まるで生ける屍のように、朽ちていくだけに見えたテイオーが、感情を露わにした。
「なにも、なにもトレーナーのことを知らないくせに!
あのひとは、ずっとボクにつきっきりでトレーニングしてくれたんだ!
一日も休まず、一緒にいてくれた!
期待してくれた!
いつか絶対に無敗の王者になれるって、してくれるって、言ってくれたんだ!」
「はあ・・・無能な働き者ほど困るのはどこの世界も同じだな。
確かにトレーニングは大事だが、休まなければすぐに限界は訪れる。
まったく、何十年前の指導者だ・・・」
テイオーの涙ながらの声も、このトレーナーの心にはなにも響きはしないのか。
呆れたように、前トレーナーのことを改めて批判した。
「それで、トウカイテイオーだけに全力を傾けた結果がこのサークルか。
ろくにデビューもしていないウマ娘が何人いる。
ただただトレーニングを詰め込まれ、できないものには罰を与えて

いたようだな。
脳みそが空なのか？
見たところ、ナイスネイチャはこのテイオーに匹敵するだけのポテンシャルを秘めているように見えるがな」
「お前の素質が、彼女たちの出番を潰したとも言えるな。
まぶしすぎる最強の血統が前トレーナーを狂わせた。
無敗の王者を育てられると夢を見たんだろう。
身の丈に合わない武器を振り回して、強くなったと思い込んだ素人。
その代償は、大きかったようだな」
灰家トレーナーの言っていることは、正しい。
トウカイテイオーにのぼせあがり、他のサークルメンバーの練習はとてもおざなりだった。
それでも自分のサークルのメンバーが弱いことは許されないと、過酷なトレーニングだけは課された。
トウカイテイオーの所為だと思ったことはなかったけれど・・・
「う、う、うううぅ・・・・」
言い返したいのに、言い返せないテイオーを見るのが辛くて、目を逸らした。
トレーナーから発言を止められていなくても、なにも言うことはできなかった。
「トレーナーのことを・・・・悪く・・・言わないでよぉ・・・」
「そう言うのなら、前のトレーナーの育成が間違っていなかったと証明するしかないな。
距離適性はまあ中距離のままでいい。
差しで戦いたいのであれば、それ向けの育成をしてやる。
しかし、なにはともあれそのコンディションを治すことからだな。
とっとと保健室に行って来い」
それだけ最後に言って、トレーナーは部屋を出て行った。
残された私達は、与えられた情報の多さにめまいを覚えつつ、それでも一つだけするべきことを思い出した。

「そうだ、保健室へ行こう・・・」

『人間には興味はないが』

これは、とあるトレーナーの独白。

やった、やったぞ!!
ついに、トレーナーに舞い戻ることができたぞ・・・
長かった、気の遠くなるような謹慎期間だった。
俺からウマ娘を遠ざけやがって・・・絶対に許さんぞ、協会どもめ。
しかしまさか、あの事件で悪名高い『アケルナル』に配属されることになるとはな。
これも運命かもしれん。
あのトレーナーの虐待のとばっちりで、俺まで謹慎させられたんだ。
憎んでも憎み足りない、前トレーナーのクソ野郎・・・
あれだけの素晴らしいウマ娘たちの、一番大事なジュニア期を棒に振りやがって。
しっかりと適正通りに育てていれば、どれだけ素晴らしい走りを見せてくれたことか。
力強く、熱い気持ちにさせてくれるレースをするウオッカ。
確かな実力がありながら、レース中に発揮しきれないナイスネイチャ。
芦毛の怪物オグリキャップ。
ＢＮＷの一角、ビワハヤヒデ・・・
他にも粒ぞろいじゃないか。
そしてトウカイテイオー・・・
１年も走っていないというのに、ひと目でわかるポテンシャル。
リハビリを超えれば復帰は難しくない。
しかし問題はメンタルだな。
前トレーナーに依存していたと聞いていたが、根は深そうだ。
難しくても、ゆっくり、じっくりと前に向かせていかないと・・・
しかし、トウカイテイオーから依存・・・依存・・・

あああああああああああああああ
俺も、依存されてええええええ
どこ行くにも着いてきてほしい！
いっしょにソファでごろごろしたい！
ちょっと他のウマ娘見ただけで嫉妬されたい!!
オグリキャップにめっちゃご飯食べさせてあげたい！
ナイスネイチャをとにかく褒めちぎって困らせたい！
ビワハヤヒデの大きな頭をこれでもかといじくり回したい！
ウオッカにフリフリのかわいい服着せて連れ回したい!!

ハッ
いかんいかん、また悪い癖が出そうになった。
前のサークルも、あまりにウマ娘に過干渉しすぎてウマ娘人権派のやつらが騒いで追い出されたんだ・・・。
タイミング悪く、アケルナルで虐待が表沙汰になって、ウマ娘に対する扱いがシビアになったからなぁ・・・・
あれさえなければ、俺は今でもあの天国で幸せに暮らしていたはずなのに・・・
とにかく、ここでは理事長からウマ娘とは距離をおけと念を押されているからな。
今のところ、このトレセン学園で俺のことを知る人間は理事長だけのはずだ。
完全に猫をかぶり、クールに、距離感を出していくぞ。
幸い、謹慎期間でよりウマ娘たちの情報は集まった。
日本にいるすべてのデビュー前から引退後のウマ娘のデータ、育成方法、対策、好物、シャンプーの銘柄まで調べてある。
有能なトレーナーであることを全面に出し、距離感を持ちつつも信頼されるトレーナーを目指すのだ。
そうすれば、ウマ娘たちも俺を邪険にはしまい。
あちらから俺に対してコミュニケーションを取ってくるはずだ。
それなら理事長も俺を非難はしないだろう。

距離感を保つ。結果も出す。
両方やらなきゃあいけないってのがトレーナーのつらいところだな。
覚悟はいいか。俺はできてる。

さて手始めにやらなきゃいけないのは、そう。
『駿川たづな』
彼女と親密になり、手を借りることだ。
理事長秘書という立場の傍ら、トレセン学園のウマ娘たちとよくコミュニケーションを取っており、信頼も厚い。
なにより、ウマ娘たちのやる気を出させる声掛け。
バッドコンディションを見抜き解消へと導くアドバイス。
トレーニング時にさりげなくウマ娘の負担を軽減する気配り。
なにこの敏腕トレーナー。サークルに一人はほしい。
伊達にあの若さで理事長秘書に納まっていないな。年齢しらんけど。
まあ人間には興味はないが、ここまで有能であるならば親しくしておいて損はない。
可能であれば、同じくトレーナーをしている名門桐生院家の一人娘、桐生院葵とも仲良くしておきたい。
この世界、コネは非常に大切だ。
前サークルではコネづくりをおろそかにしたせいで、結果は出していたのに孤立無援で誰からも助けてはもらえなかった。
ニの轍は踏むまい。
ついでに理事長ともコミュニケーションは取っておかないとな。
なんといってもこのトレセン学園のトップだ。
ここで働く以上、彼女からの評価から避けては通れない。
極端な話をすれば、すべて完璧にやったとしても、理事長から嫌われてしまえばそれまでだ。
少し話をしただけだが、そう悪い人物ではない。
勢いと思いつきで動いてしまうところがあるが、それもウマ娘のこ

とを思えばこそ。
俺と理念は通じるはずだ。
さて、ウマ娘たちが保健室から出る前に、全員の育成計画を練り上げねばなるまい。
最初が肝心だ。
ただでさえ、冷たいトレーナーだと思われているのだ。
気張らなければ・・・もう一度、天国を作るために・・・・

『肌アレ治った・・・』

私達は、あれから保健室で回復に努めた。
思えば1年前まで怪我などしても保健室を使わせてもらえることはなかった。
トレーナーがクビになってからも、骨折したトウカイテイオーは別として、外傷のない私達は保健室を使う理由は特になく、よく考えると入園から遡っても訪れた記憶はない。
それゆえ、知らなかったのだ。
保健室というものがなんなのか・・・。
「体が軽い・・・もう、何も怖くない・・・!」
「保健室にいただけで痩せたわ!?なんで?
必死に体重戻すために長距離走ってもスタミナつくだけで、なにも効かなかったのに!」
「偏頭痛が消えた・・・」
「肌アレ治った・・・え、保健室でオイルマッサージされたんだけど・・・?」
解せない。
今まで長いことみんな悩んできた、ほとんど生活習慣病のようなものばかりの症状が、わずかな保健室への滞在だけですっかり治ってしまったのだ。
トレーナーに促されるがまま治療を受けたが、ここまで効果があるなんて・・・。
コンコン
保健室の扉がノックされる。
「灰家だ。入るぞ」
「ええ、構いませんよ」
トレーナーがやってきたようだ。
しかし、出会いからそうだが、このトレーナーは実は入室時に必ずノックをする。
あれだけ突き放したような物言いをするくせ、意外と気を使ってい

るように見える。
まあ、人として当然といえばそれまでなのだが・・・
前トレーナーはそういった配慮は一切なかったな、と改めて思い出した。
「ふむ・・・それぞれバッドコンディションは克服できたようだな」
「ええ、まさかずっと悩みの種だったものがこんなにすぐ治るなんて思いませんでしたけど・・・」
「トレセン学園の保健室は非常に有用だ。
俺もよそのサークルで活動していたころから、その噂はよく聞いていた。
ぜひ、うちの厩舎にも実装してほしいと何度も嘆願したくらいだからな。
実装するための費用を聞いて、断念したよ。
これも理事長がポケットマネーで自ら作ったそうだ。
優しい理事長を持ったことに感謝するんだな」
「そ、そうですか・・・」
「しかし、保健室ではその場のバッドコンディションは治すことはできるが、根本的にトレーニング内容や生活習慣に問題があれば当然再発する。
それは我々トレーナー、サポーター、そして君たちウマ娘で見なおさなければいけない問題だ。
保健室は有用だが、入ればそれだけトレーニングに割く時間は当然減る。
使用しないに越したことはない」
「わかりました」
「よし、では一度サークル部屋へと移動するぞ」
「はい！」
距離感はあるが、ウマ娘のことに無関心というわけでもないようだ。
他サークルでの活動もあるらしい。
最初に会ったときはどうなることかと心配したが、直面の活動に支

障はなさそうだ。
「では、全員整列」
「はい」
すっとトレーナーの前に横1列に並ぶ。
今、アケルナルのサークルメンバーは、全部で８人。
一時期は２０人を超える大サークルだったことを考えると、だいぶ減ったものだ。
「それぞれの育成計画を考えてきた。
基本的にはこの計画に沿って各自、トレーニングに励んでもらう。
しかし体力が減っていて、トレーニングがわずかでも失敗しそうだと思ったら迷わず休養しろ。
モチベーションの低下はこちらで判断する。
必要であれば、気晴らしの外出を『強制的に』行ってもらう」
「は、はあ・・・」
トレーニングが失敗しそうなら休養するのはわかるけど・・・
わずかでも？
それにモチベーションが低下していたら気晴らしの外出を強制？
そんなことを指示するトレーナー、みたことがない。
「なんだ、腑に落ちないような顔をしているな。
そもそもお前たちが抱えていたバッドコンディションの多くは、練習の失敗にともなって発生することが多い。
モチベーションの低下もそうだ。
そして、練習の失敗は体力の低下が原因だ。
体力が快調であるにもかかわらず失敗することは、そうはない。
モチベーションの低下はトレーニング効果とレース本番に影響する。
多少の差は無視するが、不調のときにトレーニングをするくらいなら、思い切って気晴らしにでも行ったほうが効率がいいからな。」
当然のごとく話すが、モチベーションの低下は心の甘えだ。
少なくとも前トレーナーにはそう教わってきたし、私自身もそう思っている。

なんとなく体がだるい、やる気がでない。
そんなことで練習を都度休んでいたら、それこそ効率的ではないと思うのだ。
「まだ納得できていないようだな。
まあ納得しないのは構わない、しかし絶対に実践しろ。
従わないものには、俺がマンツーマンで気晴らしの外出に連れ出す」
「い、いえ、大丈夫です」
この鉄面皮のトレーナーと外出しては、とても気晴らしになんてなりそうもない・・・。
「まずはウオッカだな。
以前言ったように、君はマイル―中距離のレース向きだ。
性格的に差しで勝負をかけるのがいいだろう。
自主的に筋トレをしてきたおかげで、パワーはよく育っている。
あとは、スピードとスタミナを重点的にカバーすれば、終盤に強い走りができる。」
「お、おう」
「まずは6月にあるジュニア級メイクデビュー戦だ。
京都・芝・1，600mのマイル、右周りのコース。
比較的短い距離だから、まずこのレースを取るためにスピードを上げていくぞ。
見たところ、モチベーション・体力ともに問題はない。
今から準備すれば十分1着を狙えるだろう」
「了解」
「次にナイスネイチャ。
芝、中距離から長距離向けの適正がある。
作戦はウオッカと同じく差しがいいな。
特に終盤にかけて負けそうなときに、闘志が湧き出すタイプだ。
負けず嫌いな性格ゆえだろう。
今までなかなか結果が出ず、少し自信を失っているように見えるが、優れた素質を持っている。

順調にトレーニングを積み重ねれば、必ず勝てるウマ娘になる。
差しとなると、必要となるのはパワーだ。
長距離戦を走るなら、スタミナと根性も必要になる。
そして、最後の追い込みで差しきるスピードもな。
極端な話をすると、すべてのステータスが標準以上でないと中―長距離の差しウマっていうのはだめなんだ。
ポテンシャルがないとまず勧められない。
どうする、ナイスネイチャ」
「・・・そこまで言われて、自信がないからやめますと言うと思いますか。
もう3番手に甘んじるのはこりごりなの。
差しきれるウマ娘に、なってみせるわ！」
「いい答えだ。
まずはウオッカと同じく6月にジュニア級メイクデビューに出走してもらう。
京都・芝・中距離　２，０００ｍ、右周りのコースだ。
スピードとパワーを鍛えて、終盤コーナーまで足をためて差す。
その後、若駒と小倉記念と計3レース続けて中距離になるが・・・
その後の菊花賞を見据えると、少しずつスタミナも強化していく必要がある。
密度の高いトレーニングメニューになる。ついて来い」
「はい！」
「次はオグリキャップだな。
芝、マイル―中距離向け。
先行、差しどちらでも戦えるだろう。
まあ脚質から終盤巻き返す差しのほうが安定かもしれないな。
差しばかりのサークルになるが・・・。
長らく走っていなかったとは思えないトモの張り具合だ。
トレーニングに不安は少ないだろう。
スピードとパワーに重点を置けば、さしたる苦労もなく勝てるウマ娘になれるだろうな」

「む・・・そこまで評価されているとは・・・意外だ。
前のトレーナーには、マイペースすぎて闘志に欠けると言われたが・・・」
「節穴トレーナーのことは忘れろ。
しかし、だ。マイル―中距離向けで育成するのだが、ひとつだけ問題がある」
「問題・・・？」
「勝ち続ければ、必然として人気が出る。
そうなると、走らなければならないレースがあるなぁ・・・」
ま、まさか・・・
「有馬記念・・・!?」
「そうだ。
あのレースは2，５００ｍと長距離に分類される。
それまでマイルと中距離のみに特化していたオグリキャップには酷なレースになるだろう」
まだデビューもしていないのに、今から有馬記念の心配を・・・!?
気が早いにも程がある。
出られると決まったわけでもない。
結果を出せるかどうかもわからないのに・・・
「なんだ、不安そうだな。
俺が育成計画を練る以上、３年後まで君たちのトレーニング・レース・休養・お出かけ・帰省・祝勝パーティのタイミングまで工程としてまとめてある。」
そう言って、トレーナーはカバンから資料を出した。
それは人数分のスケジュールが緻密に書き込まれた予定表だった。
これだけのものを、この短時間でいつの間に・・・・
「まあ、各自の体調、体力により若干の変更は出るだろう。
そのときは都度修正していく。
必ずこのスケジュール通りになるとは思っていない。
だが、先のレースの予定も考えずに闇雲にトレーニングをしても、効率が悪いからな」

効率・・・なるほど。
確かに、このトレーナーはよく考えている。
それぞれのウマ娘の特徴を捉えているし、理解も深い。
しかし、どうしても効率を優先するあまり、冷たく、距離感を感じてしまう。
これでは、我々はトレーナーを心から信頼はできないだろう。
「・・・まあまだ練習が始まってもいない。
俺のことを信用できないだろう。
最初に言ったように、俺は親しくなるために来たわけじゃない。
君たちを速く走れるようにする。
それだけのためにいる。
結果として、それが達成できればいい」
トレーナーの表情は変わらない。
ウマ娘との関係はビジネスとして、割り切っているのかもしれない。
それならば、私達もそう接しよう。
それがきっと、お互いにとっていいのだ。

それから各メンバーの育成について説明がなされたあと、不意にサークル部屋の扉をノックする音が聞こえた。
「お、ようやく来たか。
みんな、これから君たちをサポートするメンバーを紹介する。
入ってくれ」
そう言って、部屋に招きいれたのは初めてみるウマ娘たちだった。

『よくサポーターとして世話になったものだ』

「はーい、失礼しますねぇ」
「遠いところ、わざわざすまないな」
「いえいえ、トレーナーのためなら、たとえ春も夏も秋も冬も越えて、ですよ。ふふ」
ぞろぞろと入ってきたのはウマ娘だった。
2・・・いや、3人いる。
この学園では見たことのない娘たちだった。
「さて、紹介しよう。
まずこの娘がスーパークリーク。
スタミナ系のトレーニングサポートをするのが得意だ。
また、レース中にスタミナが回復する素晴らしい技術を教えることができる。
引き継いだものは、よくコーナーでの走り方に驚いて『円弧のマエストロ』なんて呼び方までされているくらいだ」
「まあトレーナーったら、あんまりおだてないでくださいな。
ご紹介あずかりましたスーパークリークです。
いままで皆さん、辛いことがいっぱいあったと思います。
でも、モヤモヤした思いも誰かにぶつけることで気持ちが整理できることがありますから。
そんなときは、ぜひ私を頼ってくださいね」
なんという抱擁感・・・優しさが体中から溢れだしている。
つらいとき、迷わず抱きついてしまいたくなるこの安心感はいったいなんだ。
男性でなくても、母性を求める気持ちというのがわかってしまう。
「続いてニシノフラワー。
スピード系のトレーニングを手伝ってくれる。
フワフワした外見だが、サポートする能力は確かだ。
また、直線の走り方には一家言ある。ぜひみんなにその技術を学んでもらいたい。

あとは、こう見えてコミュニケーション能力が高くてな。
君たちとサポーターたちの間をうまく取り持ってくれるはずだ」
「は、はじめまして。ニシノフラワーと申します。
お花を育てるのが好きです。
みなさんとサポーターが仲良くなれば、トレーニングの成果もあがると思うので・・・
みんなで仲良くできるように、頑張りたい、です」
「うむ、ぜひ頼む。（迫真）
さて次はタマモクロス。
差し向きのこのサークルにふさわしい、中盤から巻き返すための技術を多く知っている。
普段はスタミナ系のトレーニングを教えてくれるぞ。
これで結構苦労人だから、なにか悩みがあったら相談してみるといい」
「だ、誰が昔から貧乏で碌なトレセンにも行けず苦労したって!?
大きなお世話や！
ふん、ウチはタマモクロスっちゅうもんや。
トレーナーたっての頼みっちゅうことであんたらの世話することになったけど、手加減せんでビシビシいくからな！
泣いてもしらんで！」
「中距離を走る以上、スタミナは一定以上必要になるからな。
学ぶことは多いはずだ。
以上が君たちのサポートをしてくれるウマ娘になる。
俺は君たちと親しくなるつもりはないが、彼女たちは別だ。
親身になって相談にも乗ってくれるだろう。
困ったことがあったら、聞いてみるといい」
「「はい！」」
なるほど、本人はウマ娘と距離を取りつつも、メンタルケアは彼女たちにさせるつもりか。
そうまでしてウマ娘と仲良くなりたくないなんて、なにか理由でもあるのか。

ウマ娘のことがあまり好きではないとか・・・。
「へえ、親しくなるつもりは・・・」
「ないんですね、トレーナーは、今回は・・・」
「ほーう、それはええこと聞いたわ・・・」
「・・・・?」
サポーターたちがなにか小さい声でぼそぼそと喋っていたが、中身までは聞き取れなかった。
まあ、このトレーナーが手放しに褒めるのだ。
有能なのは確かなようだ。
「でも、ウマ娘をサポーターとして雇うなんてあまり聞いたことがありません」
『アケルナル』ではそうだったらしいな。
人間である自分たちが導くんだと、変なプライドがあったようだ。
俺がいた厩舎では、引退したウマ娘にはよくサポーターとして世話になったものだ。
彼女たちは競争ウマ娘としての経験があり、造詣が深い。
いくら知識として学んでいても、経験には及ばないものがあるからな。
俺はぜひ、彼女たちにその現役時代の経験に基づいたサポートを期待している。」
なるほど、効率重視のトレーナーらしい考えだ。
ひとつひとつの発言は理にかなっているように思う。
そして、前サークルではそれなりに信頼されていたのだろう。
そうでなければ、転職したトレーナーにわざわざついてくるようなことはしないはずだ。
「8人も育成ウマ娘がいるからな。サポーター3人では本来足りないんだが・・・
まあ、みんな経験豊富だ。うまく2，3人に一人着くような形で回してみてくれ」
すると、スーパークリークさんから声がかかった。
「あら、トレーナーさん。

あの二人は連れてこなかったんですか？」
「・・・彼女たちは、まだ若い。
これからは競争ウマ娘としての道もある。
これ以上、俺の仕事に付きあわせるわけには・・・・」
トレーナーの歯切れが悪い。
短い間だが、なんでも歯に衣着せずズバズバと言い切るような人だと思ったが・・・
「では、差し向けであるウオッカ、ナイスネイチャ、オグリキャップはタマモクロスについて体育館へ。
ビワハヤヒデを筆頭に先行グループはニシノフラワーとともに運動場。
残りはスーパークリークとジム室に集合だ。
細かい指示は、彼女たちサポーターから受けてくれ」
「「はい！」」
いよいよ、本格的にアケルナル始動だ。
「しかし、トウカイテイオーはまだ保健室から出てこれないか・・・」
「骨折自体は治っているんですけどね・・・長くベッドの上でしたし、基礎体力が衰えていると思います。
こう言ってはなんですけど、1年以上故障の療養をして、以前のテイオーの走りができるとは到底思えませんが・・・」
「ふん・・・まあ、一般論でいえばそうだろうな。
しかし彼女のバネの柔らかさは天性のものだ。
逆に1年休養したことで、筋肉や靭帯の疲弊も少ない。
これをプラスとしてみることもできる。」
「トレーナーがそう言われるのでしたら・・・わかりました。
では、私はトレーニングに行ってきます」
「うむ。無理はするな。
気がかりなことがあったら、なんでもあの3人に相談するんだ」
「はい」
あくまで、自分は相談にも乗らないスタンスなのか。
このトレーナーをどこまで信じていいのか・・・今の段階では、ま

だわからない。

◇　◇　◇　◇

「ふう、みんな行ったか・・・こうして距離感を持って接するのは、なかなか寂しいものがあるな。
早く慣れなければ・・・」
本当なら、保健室から出たばかりの彼女たちを大いに労ってやりたいところだ。
やさしく撫で回してやりたい。（特にビワハヤヒデの頭）
まあ、こうして空いた時間で全国のウマ娘たちの更なる調査（という名の動画鑑賞）でもするか・・・。
そうパソコンの前に腰を落ち着けた矢先だった。
バン!!!
壊さんばかりに、勢いよくサークル部屋の扉が開いた。
「はあ、はあ、はあ・・すいません！川に沈みそうになっていたトラックを引き出していたら遅れました！
こちらがアケルナルのサークル部屋で間違いありませんか!?」
「ちょっと、待ってよキタちゃーん・・・・はあ、はあ・・・
あ、トレーナーご無沙汰です。うふふ・・・」
「き、キタサンブラック、サトノダイヤモンド・・・なぜここへ・・・
俺は君たちになにも連絡していないはずだが・・・」
「なぜって、水臭いですよトレーナー。
1年の謹慎期間があけて、トレーナー活動再開するって。
タマさんから聞きましたよ！
なんで私達に声をかけてくれなかったんですか!?」
「そ、それは君たちがもうそろそろ育成ウマ娘として入園するころだと思って・・・」
「入園まであと2年あります！
それまで、トレーナーについてサポーターとして勉強したほうが、きっと将来のためになります！

それに、ここ・・・テイオーさんがいるんですよね？」
ギラリ、と彼女の目が光ったような気がした。
「トレーナーさん、知ってて私に黙っていたんですか。
私が昔から、テイオーさんのファンだって、知ってましたよね。
次のサークルに、テイオーさんがいるって。
灰家トレーナーとテイオーさんがいるサークル。
フフフ。
私が行かないわけがないじゃないですか」
「そうそう、キタちゃんが行くなら、当然私もついてきますから。
人手、足りてないでしょう？
私とキタちゃんがいれば、スピ2スタ3で回せますよ？
トレーナーの必勝編成ですよね？」
「う、うむ・・・確かに・・・そうだ。
だが君たちはまだ若い、親御さんの許可も得なければ」
「そういうと思って」
「はい、両親の同意書です。これで安心ですね、トレーナーさん」
「・・・段取りがいいな。さすがはサポーターとしてしばらく学んだだけはある・・・」
「ふふん、トレーナーの教えがいいですから！」
「ではでは、我々キタサトコンビ。アケルナルにご厄介になります。」
「・・・・・あ、ああ。よろしく頼む」
来てしまった・・・・
そもそもの1年前のサークルを追い出されたきっかけの二人だ・・・
入園前のウマ娘がサークルに入り浸って働かされてるってタレコミ入って、査察入って、幼い娘とのスキンシップが激しすぎるからってNG入ったんだぞ・・・
このままじゃあのときの二の舞いじゃないか・・・・。
もうおしまいだ・・・俺のトレーナー人生は・・・
短い夢だった・・・
さよならウオッカ・・・男友達みたいな距離感で一緒に遊びたかった・・・

さよならナイスネイチャ・・・ぜひ姉プレイをお願いしたかった・・・
さよならオグリキャップ・・・無表情娘をとても甘やかしたかった・・・
ビワハヤヒデ・・・あのもふもふヘアーに頭うずめてクンカクンカしたかった・・・
さよなら、テイオー・・・俺のテイオー・・・・ぐす・・・

「そんなこの世の終わりみたいな顔しないでください、トレーナー。
私達もあれから反省したんです」
「私達の両親が通報したせいで、トレーナーにとてもご迷惑をおかけしてしまいまして。
でも、ちゃんと両親とも『お話』してきましたから。
もう大丈夫ですよ」
「『ひと目のあるところでは』トレーナーとも距離を持って話しますし。
普段は幼年学園にも通って、空き時間にここに来ます」
「それなら問題ないですよね、トレーナー?」
「ほ、本当か・・・・!?」
それなら、確かに大体の問題は解決できる!
理事長のオファーもクリアしている!
ありがてえ、ありがてえ・・・・!
「す、すまない、助かる・・・・!」
「いえいえ、元はといえば私達が原因ですから。
でも、代わりと言ってはなんですけど・・・
ひと目のつかないところでは、今まで以上に構ってくださいね?」
・・・い、今まで以上、だと・・・
「それと、確かこのトレセン学園にメジロマックイーンさんがいらっしゃいましたよね?
今、確か左脚部繋靱帯炎を発症して、サークルも辞めて引退も考えてらっしゃるとか・・・。
私が言いたいこと、トレーナーでしたらお分かりですよね?」

「はい・・・」
「うふふ、素直なトレーナーさん大好きです。
またいっぱい遊びましょうね。」
それだけ言って、二人はウマ娘たちのトレーニング場へと向かった。
残された俺は、もうあの二人から逃げられないのだと悟って、ひとり、泣いた。

『踊るくらいなら』

『ラップタイム・・・・1分18秒だと!?
ろくに訓練も受けていない、入園まもないウマ娘だぞ!
血統、身体能力、将来性・・・申し分がない・・・』
『へへーん!ボクはカイチョーを超えるウマ娘だからね!
これくらいは当然だよ!』
『すばらしい・・・・!
ぜひ、我がアケルナルに入りたまえ!
うちならば、その才能を活かしきることができる!
それだけの素質、よそのサークルでは持て余してしまうに違いない!』
『え、えーと・・・今日は初日だし、いろいろなサークルを見て回る予定だったんだけど・・・』
『やめておけ、他のサークルには君を育てるだけの能力のあるトレーナーなどいないぞ。
他のウマ娘と対して変わらないトレーニングメニューを与えることしかできない。
私ならば、貴様にマンツーマンで指導をすることを約束する!』
『へへへ、そこまで言うなら・・・決めた!ボク、このサークルに入るよ!
無敗の三冠王になるから、ご指導よろしくね!トレーナー!』

・・・・ああ、今でも思い出す。
初めてトレーナーとあった日のことを。
あの頃は、希望に満ちていた。
自分の能力をなにも疑わず、この先には自分の望む未来が待っていると、信じてた。
トレーナーが言ったことは嘘じゃなかった。
あれからずっと、マンツーマンで指導してくれた。
雨の日も、風の日も、体調が悪くても、とにかく走ることが大事な

んだと繰り返し言われた。
『あの、トレーナー・・・今日、すごく気分が悪くて・・・練習を休みたいんだけど・・・』
『何を言っている!そんなことで無敗の三冠王になれると思っているのか!?
ライバルたちは、みんな辛いトレーニングをしているんだ!
そいつらに勝つためにはどうすればいいと思う!』
『勝つ、ためには・・・』
『そいつらよりもさらに多くの練習をこなすのだ!
そうして初めて、無敗の帝王となることができる!』
『無敗の・・・帝王・・・。
うん、わかったよトレーナー。ボク、走るよ・・・』
だんだんと、走ることが楽しくなくなった。
勝つことがすべてで、それ以外には興味がなくて。
あんなに好きだったウイニングライブも億劫になってた。
踊るくらいなら、早く練習に戻りたかった。
サークルのみんなはほとんど自主練みたいになってた。
ボクだけトレーナーに直接指導されてる。
その特別扱いは、正直言って嬉しかった。
〈お前の素質が、彼女たちの出番を潰したとも言えるな。
まぶしすぎる最強の血統が前トレーナーを狂わせた。〉
・・・ボクの、せいなの、かな。
ボクがいなければ、トレーナーももっとサークルのみんなに公平に指導して。
みんなにちゃんと出番があって。
ボクなんて・・・いなければ・・・・
涙が滲みでてくる。
この1年、ずっと考えないようにしてきたことだった。
新しく来るトレーナーたちは、みんなボクは悪くないと慰めることしかしなくて。
だから、もう忘れようとしてたんだ。

ボクは、本当にこのサークルに入ってよかったのか・・・。
トレーナーが言っていたことはどこまで正しかったのか。
ボクが走る意味はあるのか。
こんなにも長く休んでいたのに、走ることはできるのか。
新しくきたトレーナーは、ボクの痛いところを迷うことなく言葉で突き刺してきた。
頭の中でぐるぐるとずっと同じ悩みばかりが浮かんでは消えていく。
答えは、でない。

◇　◇　◇　◇

「今のスパートよかったで！
第4コーナー回ってから、トモの辺り意識して足振り上げんねん！
差しウマは最後の直線命や、位置取りがものを言う！」
「はい、イチニ、イチニ。
一番きついところですよ、体力振り絞って！
ここでどれだけ体力使いきったかで、スタミナの付き方が変わりますよ」
「スピードトレーニングはトモの前廻りの筋肉を特に意識してくださいねー
残り3本、ダッシュ行きます」

トウカイテイオーが保健室からなかなか出てこない間。
アケルナルのトレーニングは順調に勧められていた。
サポーターとして呼んだ彼女たちの活躍は著しい。
すでにメンバーから一定の信頼を得ており、着々と能力も向上している。
さすがは俺が育てたウマ娘たちだ。

しかし俺も負けてはいない。
サークルのためにと、毎夜、一生懸命役割を果たすべく精を出していた。
「やはり、あの日の中山競バ場に駿川さんもいたんですね。
今でも覚えていますよ、ゴールライン手前で差しきったシンボリルドルフの末脚・・・」
「そう、そうですよ！まるで会場が轟くがごとく震えて！
歴史的瞬間に立ち会った！って感じで！」
「毎年中山ではドラマが起きますけど、あれは一際でしたね」
「まったくです！もう私、中山競バ場に定期的にいかないと足が震えちゃって・・・
あら、うふふ、はしたなくてすいません」
「いえいえ、お気持ちはよくわかりますよ。
おっと、グラスが空になってますね。
次はシャンディーガフはいかがです？」
「もう、こんなに飲ませて・・・トレーナーさんたら、いけない人ですねぇ・・・ヒック」
・・・・ちゃうねん。
これにはわけがあって。
サークルのためで。
決して浮気などではなく・・・。
いやそもそも浮気だなんだと俺は独身だし特別な相手もいないし・・・
「ふう、なんだか気持ちよくなってきちゃいましたしねぇ。
トレーナーさんがこんなにウマ娘に熱い思いを持っていらっしゃるなんて思いませんでしたよぉ。
最初あったときは、なんだか冷たい人だなって・・・」
「いえ、そう思われるように振る舞っていましたから。
でもアケルナルの現状を聞いて、いてもたってもいられなくて・・・」
「優しい人なんですね・・・わかりました！
不肖、駿川たづな！今まで機会に恵まれなかったアケルナルのみな

さんのために、一肌脱ぎます！
あ、ほんとに脱ぐわけじゃないですよ？もう、トレーナーさんエッチなんですからー」
「あ、ありがとうございます！」
そう、俺のサポーター編成、最後のピース。
友人枠とも言うべき、メンバーのメンタル・体力・コンディションの底上げを担う駿川たづなを口説き落とすこと。
それが今最も大切な仕事なのだ。
そうでなければ、なぜ俺がウマ娘でもない女性にわざわざおごりで毎日競バ場行って、バー行って飲んで騒いで、家まで送り届けたりしなければならないのか。
人生すべてをウマ娘に捧げると誓ったこの俺がだぞ!?
一生の不覚だ・・・。
いやまあ意外とウマ娘のことで話が合うし、正直楽しかったのは否めないのだが・・・。
なんか競バ場で興奮する駿川さん、どっちかというとパドックに出るウマ娘みたいだったし・・・。
今にも走り出しそうに見えたし・・・。
そのまま耳としっぽが生えてくるんじゃないかと思ったくらいだ。
「おっと、足元がふらついてますよ、駿川さん。
送りますから、そろそろ出ましょう」
「あらあら、すいません。
でも、駿川じゃなくて、たーづーな！って、呼んでいいんですよ？
みんな、そう呼んでますから」
「ははは・・・わかりました、たづなさん」
「もう、真っ赤になって、トレーナーさん可愛いですねー」
この人酒癖わりぃ・・・・
早いこと送り届けてお暇せねば、送られ狼に食われてしまいそうだ。
なんか目がぎらついてるんだよな。
協力も取り付けたし、これ以上はなんかいろいろまずい。

「はい、たづなさん。
おうちに付きましたよ。
ほら、靴脱いで、水買っておきましたからね、寝る前に飲んでくださいね」
「はーい、トレーナーさーん。
あ、せっかくだから中で休んで行ってくださいよー。
送ってもらったお礼もしたいですし・・・」
「いえ、明日も仕事ですから、今日はこれくらいでお暇します」
「真面目ですねぇ・・・」
「それでは、また明日。学園でお会いしましょう」
「はーい、おやすみなさーい」

ふう・・・ようやく解放された。
今は22時半か、早く寮に帰ってみんなのトレーニング成果の報告書を確認せねば・・・。
電車に揺られ、酔いも手伝って気持ちのいい眠気と戦いながら、寮についた。
「・・・あれ、電気がついてるな。
出るときに消し忘れたか。」
「おかえりなさーい」
「はいただいま・・・っとうおおおお!?」
な、なぜ俺の自室にこの二人が・・・!?
「キタちゃん、ダイヤ・・・どこから入った・・・」
「どこからって、玄関からに決まってるじゃない。トレーナー」
「私達ももういい歳ですし、窓からなんてはしたないことできませんわ」
「・・・鍵は間違いなく締めたはずだ。」
「うん、こないだトレーナー、サークル部屋に自室の鍵置いてトレーニング見に行ってたでしょ?
あのときに鍵型取って。もう、不用心だなー」
「そういう少し抜けてるところも可愛らしいですけどね」

・・・合鍵作るのははしたなくないのかよ・・・!!
問い詰めたい。しかし、2対1で勝った試しがないのだ。
俺にできることは、ただ守りを固めることのみ・・・。
「それで、トレーナーさん。夕方のトレーニングを私達にまかせて、こんな時間まで何をされていたんですか?」
「その襟についた口紅・・・たづなさんのだよね?」
・・・今日は・・・長い夜になりそうだ。

『走りながらでも考えることはできます』

アケルナルの力になろう。
そう決めた翌日、私は意を決して、サークル部屋を訪れた。
かつてトウカイテイオーさんが二着に敗れて、サークルが事実上活動を休止してから、私なりに支援はしてきたつもりだった。
それでも、誰一人として立ち直ることはなかった。
自分の無力さを痛感し、塞ぎこむウマ娘たちが痛々しくて、自然とこのサークル部屋へ赴く頻度も減った。
最後にここに来たのは、何ヶ月前だっただろう。
果たして、自分がここに来て、できることはあるのだろうか。
そう思っていたのだけれど・・・
「灰家トレーナー、あなたは一体どんな手をつかって・・・」
自分の目で見ても、まだその事実を信じられなかった。
このトレーナーが来てから、まだ半月と経っていない。
きっとまだ、なにも変わっていないと思っていた。
「はあ、はあ、はあ！」
「まだ、もう一周！まだいけます！」
「もっと足をためて！ここで体力を使っていたら最後のラストスパートでまくれませんよ！」
運動場から聞こえる活気のある声援。
見たことのないウマ娘がコーチングをしている先にいたのは、アケルナルのメンバーだった。
「きつい、きついってクリークさん！
もう、ほんと、むりぃ～!!」
「無理って言ってからが本番ですよ！
レースでの末脚はこういうところで鍛えてこそ、本番で輝くんです！
ダイワスカーレットさんはこの3バ身先にいますよ！」
「はあ、はあ・・・くっそ、絶対負けねえ・・・・!!!」

あれは、前トレーナーに反抗的だったため、ろくに練習を与えられなかったウオッカさん。
他の子のようにふさぎ込んでいたわけではなかったけど、前トレーナーがいなくなり、行き場のないつらさ、怒りを別のトレーナー達にぶつけていた。
それが、今は嘘のように走ることを謳歌しているように見える。
「ビワハヤヒデさんは、少し考えすぎてます・・・
データや資料も大切ですけど、まずは基礎的な体力がないと、机上の空論ですから・・・。
まず今日は校庭を５０周することから始めてくださいね」
「ご、５０周!?
い、いや確かに私は中―長距離で考えているが、今の私に足りていないのはスタミナよりもスピードと知識であるとこの私の作成した資料にもとづいて考えれば・・・」
「ふふ・・・
まさか、灰家トレーナーの考えた育成メニューが、信じられないっていうんですか・・・？」
「うっ」
「なるほど、ではビワハヤヒデさんの資料の添削をしましょうね。
まず現在のステータス、かなりご自身を過小評価してますね。
これまでのトレーニングから考えて、少なく見積もってもスピードは・・・・」
「うっうっ」
「ついでにご自分の脚質、適正に未だに誤解がありますね。
ご自身が小さいころにお怪我をされたせいで、大切なところで差し込む脚力がないと寸前で諦める癖がついてます。
そのせいで、学友のお二人に勝ち切れない・・・
身に覚え、ありますよね？」
「うっうっうっ・・・」
「はい、わかったら走りましょう。時間は有限です。
大丈夫、走りながらでも考えることはできますよー」

「はい・・・ぐす・・・」
　ああ、あの論理性ではトレセン学園ではトップクラスのビワハヤヒデさんが言い負かされている・・・
　あんな小さな子に、見るも無残にコテンパンに・・・・
　しまいには泣きそうになりながら校庭を走り始めてしまった。
　え、今から５０周もするの・・・？
「ほら、ビワさん５０周のあとはお望みのスピード訓練もさせて差し上げますからね！
　早く終わらせないと時間がなくなってしまいますよー」
　可愛い顔して、あの子は鬼か・・・・
　これでは、１年前の過酷なトレーニングの再来になってしまうのではないでしょうか。
　そう思い、サークルメンバーたちの顔を見ても、誰ひとりとして俯いている子はいない。
　むしろ、負けてなるものかと闘志を燃やしてトレーニングに励んでいる。
「驚いているみたいですね、たづなさん」
「それは・・・驚きもします。
　一体どんな魔法を使えば、こんな短時間でみんなを立ち直させることができるんですか・・・？」
「まあ、別に立ち直らせたわけではないんです。
　そもそもウマ娘というのは、私の知る限り、みんなとにかく走るのが好きな子ばかりでしてね。
　走っていれば楽しい、速く走れれば楽しい、それで勝てればもっと楽しい。
　そういう単純な子たちなんです。
　だから、まず一人ひとりに君たちは速く走ることができると伝える。
　そして、速く走る方法を教える。
　それが結果として現われれば、より練習に身が入る。
　まあ、その結果がついてくるのはまだ先でしょうが・・・・簡単な

ことです。」
その簡単なことができれば、世の中のトレーナーたちは誰も苦労はしませんよ・・・。
「恐れいりました・・・。
さすが理事長が、肝いりでアケルナルのトレーナーに指名された方です。
過去、やっぱり大きなサークルでウマ娘さんを育ててこられたんですか？
理事長から、灰家トレーナーのことはなにも調べるなと言われていまして・・・」
「・・・調べられても、謹慎理由までは隠されているはず・・・」
「え、なにかおっしゃいました？」
「いえ！それほど大したサークルではないですよ。
あまり結果も残せませんでしたしね。
ただ、ウマ娘たちの知識だけは少し自信があります。
このサークルの子はもとより、全国のライバルのことも・・・」
「なるほど、であればレースの際の対策もいくらでも立てることができますね」
「まあ、地力あっての話ですから。
いまはしっかりとトレーニングをこなすことです」
「私も、及ばずながらお手伝いさせていただきますよ」
「ありがたい。万人の味方を得た思いですよ」
お世辞でも、優秀なトレーナーに褒められると頬角が上がってしまう。
それが好意を抱いている相手ならなおさらだ。
「おおげさですねぇ。
あ、ちなみに私、今日は１８時で退勤できる予定なんですが、灰家トレーナーは・・・」
すると、後ろから素早い動きでトレーナーが引っ張られていった。
「ほらほら！トレーナー、なにイチャついてんねん！
今からオグリキャップたちのシャトルランするから、みんなのトモ

でも確認しいや！」
「はいはい、わかったよタマモクロス。
すいません、たづなさん、私は体育館の方へ行ってきますので、運動場の方をお願いします」
「は、はーい」
ああ、行ってしまった・・・。
今日は中山競バ場でスプリンターズがあるのに。
仕方ない、仕事が終わったら一人寂しく家で中継見よう・・・

◇　◇　◇

ずるずるとタマモクロスに引きずられていった先は、体育館裏だった。
「まったく、また新しい女引っ掛けて・・・油断も隙もないわ」
「いや、あれはそういうんじゃないって何度も説明してるだろう・・・。
たづなさんはこのトレセン学園でも顔が利く方だし、能力も高い。
これからこの学園で活動していく上で、外すことのできない相手だって。
大丈夫、節度のある距離感を持って接する。
問題はない」
「飲んで自宅まで送ってる時点でアウトや・・・
それだけやない、桐生院ちゅー子にもモーションかけとるんちゃうんか？」
「いやいや、桐生院家のお嬢様だぞ。
俺みたいなペーペーは基本相手にされないさ。
まあ、なにかあったときに窓口は多いほうがいいからな。
軽くコミュニケーションを取るぐらいは許されるだろ？」
「それが箱入り娘にゃ案外有効だったりするんよなぁ・・・」
いやいやそんな。
みんなそんなに惚れやすいわけないだろ・・・
まあたづなさんは脈ありな気はするが、ウマ娘ではないので俺から

の脈はない。
「それで、こんなところまで連れてきて、いったいどうした。
トレーニングは大丈夫なのか？」
「あー、あいつらのトレーニングはとりあえずキタにまかせてきたで。
今はとりあえず、いろんなサポーターと顔合わせて、それぞれのやり方を学んでもらったほうがええ。
みんな得意な分野も違うしな。
それよりも、サトノ家のお嬢様からこれ預かってきたで」
「おお、さすがに名家の情報収集力はすごいな・・・俺個人では限界があるからな」
「それ手に入れるために、ダイヤはちょっと実家に連れ戻されてるみたいやけど」
「う・・・いやまあ、これはそもそもダイヤの要望もあって俺も動くわけで・・・」
「どーせダイヤの件なくても、走れないウマ娘なんて見過ごせんとちゃう？」
「・・・そういう説もある」
「はっ、まあええわ。
とにかく、確かに渡したで。
軽く読んだけど、普通に考えたら手の施しようがない。
しかも相手はメジロ家の期待の星や。
うかつに手を出すには危険すぎるで」
「わかってるさ・・・でも、助けてやらないとな。
うちの若いのがうるさいからなぁ」
昔から、ずっと憧れていたのを見てきた。
彼女が天皇賞を取ったときは、自分のことのようにおおはしゃぎしてたな。
あの子の笑顔を曇らせないためにも、なんとかしてみせよう。
まあ、プランは一応浮かんではいる。
俺は、渡された資料を持ってサークル部屋に戻ることにした。

『主治医診断書』
『調査報告書』
対象者：メジロマックイーン

『幼稚園のお遊戯を見ている方が有意義ですわ』

私は、ウマ娘界屈指の名門であるメジロ家に生を受けた。
気高さと強さを合わせ持つことが、我がメジロ家の家訓。
何も悩むことなく、私は競争ウマ娘としての人生を、レールの上を進むが如く歩んできた。
才能もあったのだろう。
入園当初から期待の新星と呼ばれ、実際に結果を出した。
自分のライバルは、自分自身。
自分のレースをすれば、おのずとレールを外れることなく目的地へと辿り着ける。
そう思っていた。
心が熱くなることはない。
ただ、必要なトレーニングを行い、必要な戦略を立て、レースに勝つ。
それの繰り返しが、これからも続いていくのだろう。
入園していくつかレースをこなしたころ。
いつものように残ってトレーニングをしていると、コースの逆側を私以外のウマ娘が走っているのが見えた。
こんな時間まで、いったい誰だろう。
そうして目を向けると、そこにいたのは同じく今年入園した、トウカイテイオーだった。
入園から無敗。
メジロ家のような名門ではないが、彼女の親はウマ娘史上に名を残す名バだ。
トウカイテイオーも私と同じく入園から期待を寄せられ、その期待通りに結果を残した。
多少の親近感はあったが、それでも自分の方が強いと自然と思っていた。
意識していたわけではないが、私と同じ土俵に立たんとするウマ娘だ。

自然と、コースを走る脚に力が入る。
「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ」
このまま追いついてしまえば、違いを肌で感じて帰ることだろう。
そう思い、追いつこうとしたところだった。
「なっ・・・」
私の意図を察してか、逃げるようにテイオーは脚を速めた。
生意気な・・・
元来、逃げ・先行向けで追うのは得意ではないが、そうも言っていられない。
もう日も落ちた。
とっとと追いついて、ゆっくりとシャワーを浴びて帰ろう。
「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ」
・・・・・追いつけない。
差が、縮まらない。
この私が、ほとんど全力を出しているのに、追いつけない・・・!?
気を抜くと、むしろ追い抜かさんばかりに食らいついてくる。
身の程知らずにも、この名門メジロ家のこの私に勝とうとしている。
許せない。
この二人だけのレースに負けたら、ずっと後悔し続けるだろう。
そんな確信を持って、最後は意地になってただただ走り続けた。
「はあ、はあ、はあ、はあ・・・なんで・・・走るのを・・・やめないの・・・」
「もー・・・とっとと・・・帰ってよぉ・・・」
脚が重い・・・もう何十周走ったか覚えていない・・・
相変わらず、テイオーは逆側を走っている。
さすがに彼女も疲れたのか、足取りは重い。
「あと、少しで・・・追いつく、帰れますわ・・・」
「ボクは、無敗のウマ娘になるんだ。こんなところで負けられないんだ・・・」
気力だけで走っていたが、ついに限界が来たようだ。

私は倒れこむようにコースの上に横になった。
名門メジロ家の娘ともあろう私が、何たるザマ・・・。
追いつかれてしまうかと思ったが、相手も限界らしく、逆側で倒れていた。
静かなコース場に、彼女の荒い息遣いが響いていた。
勝てなかった。
でも負けなかった。
悔しいと思ったし、抜かれなかったことに安堵もした。
「はぁー・・・もう疲れましたわ。そろそろ帰らないと、執事や運転手が心配しますわね・・・。」
重い体を起こして、シャワー場で汗を流す。
着替えを終え、校門を出る手前で、間の悪いことにトウカイテイオーと鉢合わせた。
「あら、あなたは・・・」
「あー!っと、君も今帰り?」
「え、ええ。そうですわ。少しトレーニングに熱が入ってしまいまして」
「へー、そうなんだ。実はボクも、『すこーし』だけ熱が入ってね!」
「・・・ふふふ、奇遇ですわね」
「そうだね、キグーだね!」
我ながら、白々しいやりとりだった。
「私は、メジロマックイーンと申しますわ。あなたは?」
「ボクはトウカイテイオー。無敗の三冠ウマ娘になるから覚えておくといいよ!」
その日、トウカイテイオーという名前は私の心に刻みつけられた。
おそらく終生のライバルになるだろうと、強く思った。

それからも、来る日も来る日も私とテイオーはコース場で居残りトレーニングをした。
走っている間はお互い喋らず、相手を追い抜こうと必死に走った。
３０戦３０引き分け。

それが、彼女との戦績。
その間、私もテイオーも勝ち星を積み上げた。
お互い走る距離、走るレースが異なったせいで直接対決はなかった。
勝ち続けるとともに、高まっていく名声。
一人では少し重荷に感じていたかもしれない。
同じ立場であるテイオーがいたおかげで、負けるものかとさらなる高みを目指せた。

自主練ではまだ決着が着いていなかったから、これからも彼女との奇妙なトレーニングは続いていくのだと思っていた。
すると、３０日目の最後に、珍しく彼女からコースで話しかけられた。
「やあ、メジロマックイーン。今日も奇遇だね」
「ええ・・・どうしたんですの。こんなところで話しかけてくるなんて・・・」
「んーとね、実はボクのトレーナーが、夜もマンツーマンで指導してくれるって言うんだ。
だから、自主練は今日でおしまい。
ずっと一緒に走ってたから、最後くらいは挨拶しとこうと思ってさ」
「・・・別に、一緒に走ってたわけじゃありませんわ。
たまたま、同じ時間に同じ場所で自主練していただけです。」
「ハハハ、そうだったね。たまたまだった。
でも、結構楽しかったんだ。こうして二人で走るの。
ずっと一人で走ってきたから。
ボクだけだったらごめん・・・。
それじゃあバイバイ。マックイーンも、がんばってね」
「あ・・・・」
あれだけ長く走っていたとは思えないほど、軽い足取りでテイオーは走っていった。

なんで私は、最後だというのに違う言葉をかけられなかったんだろう。
本当はこの会話のない時間を、私も楽しく感じていた。
ずっとこのまま一緒に走れると思っていた。
遠ざかっていくテイオーに、言いたいことが浮かんでは消えた。
寂しい。
ウマ娘として走り始めて、初めてそう思った。
「・・・ふん、トレーナーからマンツーマン指導なんて。
ずいぶんと目にかけられているのね。
私も、気を抜いていたら置いて行かれてしまいますわ」
これからも、私とテイオーの向く先はきっと同じはずだ。
私が速く走ることを求め続ければ、また道は交わる。
そのときこそ、改めて決着をつけよう。
私はまた同じコースを一人、走り始めた。

サークルが違えば、同じ学園内でもなかなか顔を合わせることはない。
たまにトウカイテイオーを廊下や食堂で見かけるくらいだった。
しかし、合うたびに彼女は表情が固くなっているように見えた。
前は誰とでも分け隔てなく接する、天真爛漫とした娘だったのに。
テイオーの走るレースは極力見るようにしていた。
テイオーステップと呼ばれる軽快な足取り。
彼女の柔らかい足首と、類まれなる運動神経はダンスにもいい影響を与えているようだった。
テイオーの人気は、レースだけでなく、ウイニングライブの躍動感も大きな一因だったと思う。
それが、いつからだろう。
テイオーのウイニングライブが投げやりのように感じだしたのは。
『各ウマ娘、最終コーナーを回った！
折り返して来たのはテイエムオペラオー！
二番手マヤノトップガンとの差は2バ身！

このまま決着がついてしまうのかー!?
いや、外からトウカイテイオーが来てる!
直前まで脚をためていたのか、これは速い!ぐんぐんとその差をつめる!』
『抜いたー!勝ったのはトウカイテイオー!
最終コーナーから6人抜いて、最後はダントツのトップ!
これで皐月賞、日本ダービーを制し、無敗でクラシック二冠を手にしました、トウカイテイオー!
もしこれで菊花賞も取るようなことになれば、シンボリルドルフ以来の無敗の三冠王が誕生します!
期待が止まりません!』
『やはり、彼女の差しウマとしての素質を鍛えたトレーナーの育成の賜物でしょうね~。
最終コーナーからゴボウ抜きする爽快さにファンになった人も多いでしょう。
またこのサークルのトレーナーは、入園当初よりトウカイテイオーの非凡さを見抜き、ほぼマンツーマンによる指導を行っていると聞きます。
しかし、このサークルでは他のウマ娘たちの育成にも手を抜かず、みっちりトレーニングをしているとか』
『さあ、それでは勝者であるトウカイテイオーをセンターに、ウイニングライブです!曲は・・・』
あれほど昔は楽しそうに踊っていたのに。
踊る時間や体力が惜しいと言うように、適当にリズムだけ合わせている。
これが、あのトウカイテイオー・・・?
そもそも、あの娘は脚をためて追い込むようなタイプじゃない。
自由に走る先行の方が合ってるはず・・・
いてもたってもいられず、私は競バ場の出口でトウカイテイオーを待った。
それほど待つことなく、テイオーは来た。

そばには彼女のトレーナーもいた。
「・・・テイオー、お待ちなさい」
「なんだい、マックイーン。ボクのレースを見に来てたの？
速かったでしょ。
もうすぐ、宣言通り無敗の三冠王に、なるからね」
「ええ、速かったですわ。
でも、なんですの、あのウイニングライブは。
あれじゃあ幼稚園のお遊戯を見ている方が有意義ですわ」
「・・・うるさいなあ、速く走るのに、ライブなんて関係ないだろ。
観客は、レースを見に来てるんだよ。
ライブなんて二の次なんだ。
速く走ることができれば、あとのことはどうでもいいよ」
「な・・・！
すべてのウマ娘の憧れである、ウイニングライブを、どうでもいいなんて・・・！
撤回しなさい、テイオー！」
「・・・トレーニングがあるからボクは行くよ。
マックイーンも、こんなところにいないでトレーニングしたら？」
「待ちなさい、テイオー！あなた、本当にそれでいいんですの!?」
私の声も、テイオーにはなにも伝わらないようだった。
「メジロ家のご令嬢は余裕ですな。
こんなところでライバルに激励ですか？
次は春の天皇賞でしょう。
一族の目的である三世代連続のトロフィーを前にして、油を売っていていいのかね」
「あなた・・・あなたが、トウカイテイオーを追い詰めたんですわね！
あれほど楽しそうに走る娘だったのに！
相手をもてあそぶように最終コーナーで差すやり口・・・とてもあの頃のテイオーからは想像もできませんわ！
今からでも遅くない、先行に変えて・・・」
「・・・うるさい!!!

トレーナーが、差しのほうが適正があるって言っているんだ！
最後にみんなぶちぬいたほうが観客も喜ぶって！
だからこれでいいんだ！これが正しいんだ！」
「テイ、オー・・・・」
私の言葉は、届かない。
トレーナーのことを信じきったトウカイテイオーにかける言葉は、なにも浮かばない。
「もういいだろ・・・次の菊花賞まで、もっともっとトレーニングしないと。
じゃあね、マックイーン」
トレーナーと共に、遠ざかるテイオー。
このままなにも言わなければ、あの夜の自主練最後の日となにも変わらない。
だから、なにか、言わないと・・・
「・・・テイオー！
私は、春の天皇賞で必ず1着になります！
気高く、強いウマ娘に！
あなたがライバルだと、目標だと胸を張って言えるような優駿に！
必ずなる、いえ、そう『ありつづけ』ますわ！
だから、私の走りを見ていなさい！」
これは宣言だった。
私が終生のライバルだと認めたトウカイテイオーだけに誓う。
その日から、私達の道は分かたれた。

『すべてあなたの自由なのに』

それから、私は今までにも増してトレーニングに励んだ。
春の天皇賞は３２００ｍの超長距離戦。
並みのスタミナではとても勝負にならない。
付け焼き刃のトレーニングではだめだ。
今から体を作っていくことで、万全を期して念願の春の天皇賞を迎えよう。
自宅のコースで体を追い込んでいると、執事が声をかけてきた。
「お嬢様、サトノ家のダイヤモンド様がいらっしゃっております」
「ハア、ハア・・・あら、ダイヤさんが？
もう少しだけ走るから、待っていてもらってちょうだい」
「かしこまりました」
切りのいいところまで走りきったあと、着替えて来客を迎えた。
「すいません、練習中のところおじゃましてしまって」
「いえ、構いませんわ。そろそろ切り上げようと思っていたところですもの。
ところで、今日はいかがしまして？」
「今日はトウカイテイオーさんの三冠のかかった菊花賞じゃないですか。
せっかくなので、マックイーンさんと一緒に見たいと思いまして」
「ああ・・・そうね、練習にかまけて忘れるところでしたわ。
今日、でしたわね」
嘘だった。
執事には、レースが始まる前に呼ぶように言ってあったし、アラームもセットしていた。
テレビのあるロビーに行くと、ちょうどパドックをやっているところだった。
マントを投げ、鍛えた四肢を観客に魅せつける出場者たち。
テイオーもその鋭い体躯を晒した。
「わあ！すごいトモの張り・・・絞りこんできてますね」

「ええ、そうですわね・・・」
いえ、これは・・・絞りこみすぎている。
トモが張っているというより、太もも部分に贅肉がほとんどない。
そのせいで、血管が不自然に浮かんで張っているように見えているだけだ。
まるでスプリンターズにでも出るかのような脚線。
菊花賞は3，000mの長距離に該当する。
果たしてあの痩せぎすな体で、その長い道のりを踏破できるのか・・・・
『本日は菊花賞、歴史的瞬間を目撃しようと、京都レース場にはたくさんのファンが詰めかけています。
なんといっても本日の注目は三冠がかかっている一番人気トウカイテイオー。
ここまで無類の強さで勝ち進んでまいりました。
二番人気はセイウンスカイ。この順位はやや不満か。
さあ、各選手ゲートに入りました。出走が近づきます。
ゲートが開いた！一斉にスタートを切る。
先頭は・・・メジロパーマー！
早い早い、まるでラストスパートの如くぐんぐん選手たちを引っ張っていく！
このペースで3，000mを走りきれるのか、メジロパーマー』
『彼女の脚質には合ってますね』
『後続だいぶ離れて10番手、トウカイテイオーは機を伺っている。
今回も終盤見事なゴボウ抜きが見られるのか。
優駿が揃っている菊花賞、誰が勝ってもおかしくありません』
『勝負は中盤、どれだけ脚を残せるかにかかっているでしょう』
『さあ、各選手最後のコーナーを折り返してきた！
トップは依然、メジロパーマー！
苦しそうな顔をしているが、脚色はまだ衰えない！
すごい根性だ！

追うトウカイテイオー、しかし差はなかなか縮まらない！
このまま勝負が決まるのか、残り２００を切った！
最後の直線だ、夢の三冠がかかってるトウカイテイオー！
圧倒的な逃げを見せるメジロパーマー！
その差２バ身！追いすがる！追いすがる！
トウカイテイオー、いつもの差し脚が届かない！
今、ゴールラインを切った！
勝ったのはメジロパーマー、メジロパーマーです！
メジロ家の逃げウマ娘メジロパーマー、菊花賞レコードを出し勝利しました！』
『すごい逃げ脚でしたね。今までも先行スタイルではありましたが、どこか吹っ切れたように見えました』
『これからの走りに期待が持てます。
しかし負けたとはいえトウカイテイオー、人気に恥じぬ素晴らしい走りを見せました。
観客からは、メジロパーマーだけでなくトウカイテイオーへの声援が惜しみなく送られています』
「テイオーさん、負けてしまいましたね・・・。
キタちゃん、悲しむだろうな」
「ええ、そうね・・・」
テイオーが・・・負けた。
メジロパーマー。メジロ家ではかなり異色で、型にはまらない子だとは思っていた。
あんな逃げ脚を見せるウマ娘だったなんて・・・。
私なら、彼女相手にどう戦おう。
パーマーのスタミナが切れるのを待っていたら、この菊花賞の二の舞いになる。
なら、序盤から背後を付けて掛からせるしかないか。
しかし、もしテイオーが差しではなく先行で走っていたら。
中盤から終盤にかけて、何人も追い抜くのにスタミナを消費していた。

最終コーナーに着く頃には、スピードを維持するだけで詰めることはできていなかった。
先行であればスタミナは残しやすい。
最後、メジロパーマーとの一騎打ちで持ち前の瞬発力でもってまくることはできたかもしれない。
・・・まあ、結果を見てからなら誰にでも言えるわね。
菊花賞2着は誰にでもできることではないし、その作戦は決して間違いだったとは言えない。
今は素直にテイオーにお疲れ様と言おう。
そうして見ていると、なにやら競バ場が騒然としている。
白熱のレース後の騒がしさじゃない。
不意の事態が起こったような、困惑した空気。
『これは、どうしたことでしょう。
トウカイテイオーが座り込んでいます。
疲労で立てないのでしょうか』
観客席の前で、膝をつくテイオー。
様子がおかしい。
『やだ・・・待ってトレーナー・・・ボク、がんばるから。
もう負けないから、だから・・・・
トレーナーあああああ!!!』
突然。
テイオーの叫びが場内に響き渡った。
そのまま、ふらりとよろけたあと、テイオーはその場に倒れた。
「テイオーさん、どうしたんでしょう。
トレーナーさんとトラブルでしょうか」
「・・・あのトレーナー、まさか」
「マックイーンさん、なにか思い当たるんですか・・・?」
「ええ、少しだけ。執事!」
「はい、お嬢様。こちらに」
「速やかに、サークル【アケルナル】の調査を実施しなさい。
トウカイテイオーとその他メンバーの育成状況の実態を明らかに

するのです」
「仰せつかりました」
私の杞憂であればいい。
しかし、振り返ってみればおかしな点はいくつかあった。
一般練習を終えたあとも、夜まで及ぶマンツーマン指導。
日を追うごとに表情をなくしていくテイオー。
サークルメンバーも練習が厳しいせいか、生傷が絶えないと聞く。
強豪サークルゆえ表沙汰になってはいないが・・・。
そして今日のパドック。
適切な休養を与えられているとは思えない。
鬼気迫る表情のトウカイテイオーの姿が目に浮かぶ。
もし、私の思っているとおりならば、一刻も早くトレーナーとテイオーを離さなければ、取り返しのつかないことになってしまうかもしれない。

◇　◇　◇

結果から言えば、サークルアケルナルは完全なる黒だった。
詳細は省くが、度を越した練習を課し、アフターケアを怠っている。
トウカイテイオーの活躍もあり、目を向けられていなかった他のメンバーへの扱いは特に酷い。
そして、トウカイテイオー自身への過酷なトレーニングスケジュール。
まさか1日の休養も与えられていなかったなんて・・・。
私はすぐにこの調査結果を協会へと報告し、まもなくアケルナルのトレーナーは逮捕された。
このことは世間を大いに騒がし、多くのサークルの活動実態が調べられ、活動休止やトレーナーが懲戒免職となることも多かったようだ。
中にはサークルメンバーとスキンシップ（意味深）をしたり、まだ入園前のウマ娘をサポートメンバーとして働かせていたトレーナー

もいたらしい。
私はよく懐いてくれているサトノダイヤモンドさんを思い浮かべ、無性に腹がたった。
あの子くらいの歳の子をこき使っていたというのか。
許せない。
これでテイオーも今までのトレーナーのことは忘れて、立ち直ってくれればいいのだが。
なんならうちのサークルに移籍してくれても私は全然構わない。
それはもうまったく構わない。
一向に構わない。
しかし、そうはいかなかった。
「テイオーが、ベッドから出ないですって・・・？」
「はい、骨折はもう治っているはずなのですが、やはり前トレーナーへの依存が強かったようで・・・
ほかのサークルメンバーも同様のようです。
あちらはトレーナーやスタッフに対し、不信感や恐怖がまだあるようで」
「そうですの・・・。
わかりましたわ。なら私は私の方法で、テイオーを前に向かせるだけです」
宣言どおり、春の天皇賞で1着を取る。
私の背中を彼女に見せて、無理矢理にでも下ではなく前を向かせるしかない。
幸い、コンディションは良好だ。
この調子であればおそらく春の天皇賞は取れる。
そう確信していた。
「ところでお嬢様。最近主治医の診察を受けていらっしゃらないようですが。
主治医が嘆いておりましたぞ」
「今、とても調子がいいんですの。
診察の必要などとてもありませんわ」

さあ、今日もトレーニングへ行こう。
待っていなさい、テイオー。
必ず勝って、あなたを立ち直らせてみせる。

◇　◇　◇

『春の天皇賞、制したのはメジロマックイーン！メジロマックイーンです！
名門メジロ家の意地を見せました！
これで三世代に渡り、春の天皇賞トロフィーを持ち帰ることとなります！』

春の天皇賞を『予定通り』1着で終えることができた！
長らく超長距離に向け準備してきましたし、当然ですわね。
一族の悲願でもありましたが、今はそれよりも、この報告を早くテイオーにしたい。
お祖母様やトレーナー、サークルメンバーへの挨拶もおざなりに、私はテイオーの待つ病室へと駆けていった。
思えば、直接会うのは日本ダービーの帰り以来だろうか。
痩せてしまっているだろうか。
ご飯はしっかり食べているだろうか。
たしかテイオーははちみーが好きだった。差し入れに買っていこう。
好みは硬め濃い目多めでよかったかしら。
よし、準備は万端。
満を持して、私はテイオーの病室の扉を叩いた。
「テイオー、いますの？」
何度も声をかけるが、返事はない。
衣擦れする音はするので、中にいるのは間違いないと思うのだが・・・。
「もう知っていらっしゃるかもしれませんけど、春の天皇賞を取りま

したわ。
あの日、宣言したとおり」
胸が熱い。
この日のために私は、ずっと走り続けてきた。
またテイオーと走るために。
「私は結果を出しました。
次は、あなたの番ですわ。
いつまでそこでくすぶっているつもりです？」
練習でもいい。
レースでもいい。
あの日のように逆向かいで離れて走っても構わない。
「あの優駿の血統のウマ娘が、ここで終わるつもりですの？
あなたなら、またあの頃のように走れます！
今からでも遅くない、また学園で一緒に・・・」
同じレースに出て。
最後の直線でしのぎを削り。
そして、ウイニングライブを共に踊れたら、どれだけ嬉しいだろう。
「もう！
あのトレーナーはいないんですわよ!?
あなたが、あのトレーナーに縛られる必要はない！
練習も、走り方も、すべてあなたの自由なのに！」
叫んだ。
私の声が、彼女の心に届くように。
それでも、テイオーからはなにも返ってはこなかった。
「・・・差し入れ、ここに置いていきますわ。
次来るときは、春の天皇賞を連覇したときにします。
その時になって、慌てて私の背中を追ってきても、もう遅いかもしれませんけど」
まだ、足りない。
テイオーを振り向かせるにはもっともっと強く、速くならなければ。

私を無視できないくらいに。

◇　◇　◇

それからも、スケジュールの合う限りＧ１レースに出て連勝した。
トレーニングも休みを減らして取り組んだ。
その甲斐もあってか、我ながらかなりかなり絞られてきたと思う。
今なら、誰にも負ける気がしない。
メジロパーマーにも
全盛期のテイオーにだって。

◇　◇　◇

「左脚部繋靭帯炎・・・？」
「はい。お嬢様のことですから、この病気については改めてご説明するまでもないとは思いますが・・・」
最近、少し左足の動きがぎこちないと思い、主治医に相談した。
振り返ると主治医なのに、診察させたのは久方ぶりかもしれない。
しかし、それよりも病名を聞いて私の頭の中は真っ白になった。
事実を受け入れることを、頭が拒否しているようだ。
繋靭帯炎。
呼んで字の通り、指骨・中手骨間のつなぎの役割をしている繋靭帯が炎症を起こしたもの。
一度発症すれば最低でも８ヶ月から１年程度、治療期間を要する。
また治療が終わったとしても、トレーニングを再開すると再発することが多いことで知られている。
競争ウマ娘として、致命傷となりえる病気だ。
「お嬢様の病症はだいぶ進んでいます。今すぐ治療を始めれば、将来的に歩けなくなるというほどではないのですが・・・。
競争ウマ娘としてのトレーニングは、もう諦めるほかないと・・・」
「・・・可能性は、ないんですの」

「費用を掛けたからといって治るものではありません。
都市伝説のような、何でも治す鍼師でもない限り・・・・・復帰は絶望的です」
「ふ、ふ・・・そう。
メジロ家のエースも、これでおしまいね・・・」
「お嬢様・・・」
走ることがすべてだった。
生まれてからこれまで、家のために、自分のために、ただ走り続けてきた。
目標としたライバルともう一度走りたくて。
その結末がこれ・・・？
「あ、お嬢様・・・!?」
気づいたら家を飛び出してコースを走っていた。
私はまだ走れる。
こんなにも。
少しだけ、違和感があるだけなのに。
雨が降っていたが、構わず私は走った。
1周、2周、3周。まだ短距離コースにも満たない。
5、6、7周したところで、左足に痛みが走った。
深い痛みだ。体の内側から響くようで、決して無視できない。
「は、は・・・まだ3，２００ｍには足りないのに。
もう私は春の天皇賞に出ることはできないということですの・・・」
叶うなら連覇を。
そしてトウカイテイオーに会って、もう一度だけ励まして。
同じサークルで、練習を・・・
それだけのために、これまで練習してきたのに・・・。
「う、う・・・・」
「テイオー・・・ぐす・・・・」
走れない私に価値はない。
テイオーに会う資格は・・・・ないんだ・・・。

◇　◇　◇

ダバアアアアアアア
「うわあ、トレーナー!?
急にどうしたんですか、涙腺壊れたんですか!?」
「泣〝い〝て〝な〝い〝・・・・」
「いや、無理ありますよ、滝みたいになってますよ・・・」
腹が立って俺は叫んだ。
「こんなん泣くわあああ!!
なんだこのめちゃくちゃかわいそうなウマ娘!
健気すぎる!慰めたい!抱きしめて励ましてあげたい!」
「いえ、そんな開き直られましても・・・」
「ていうかなんだこの調査報告書!めちゃくちゃ感情こもってるぞ!
誰だこの報告書書いたのは!」
バン!と大きな音を立てトレーナーの寮の自室の扉が開いた。
「私です!」
「お前かダイヤ!もう勝手に部屋の扉が開いたことには突っ込まんぞ!
なんでこんなに詳細に心情まで書かれているんだ!
もう想像で書いてるんじゃないだろうな!」
「サトノ家の総力を決して調査しました!
心情は補足もありますが、マックイーンさん分析第一人者である私とメジロ家のお祖母様の監修のもと書かれたので9割方正しいものと自信を持って言い切れます!」
「よしわかった!とりあえずはしたないのでノックもせずドアを勢いよく開けるのはやめなさい」
「あら、私としたことが。ふふふ」
もう上品に笑ってもごまかせんぞ。
しかし、あのメジロマックイーンとトウカイテイオーにこんな因縁

があったとは・・・。
「で、どうですかトレーナー。この報告書をお読みになって」
「・・・ふん、決まっている。
もともと治したいとは思っていた。
防ぎようのない病で道を閉ざされた優駿。
それを黙ってみていられるほど俺は大人じゃないんでな。
しかもこんな話を読まされたあとじゃな・・・。
メジロマックイーン。
嫌だといっても絶対にまた走れるようになってもらうぞ・・・・!!」
「やったー!」
「マックイーンさん復帰だー!」
「メジロマックイーンの復帰はトウカイテイオー攻略のきっかけになるかもしれんしな。
アケルナルとしてもメリットのない話ではない」
「もう、素直じゃないんですから」
「・・・うるさい。君らまだトレーニングのサポート中だろ。さっさと戻りなさい」
「はーい」
「それじゃあトレーナー、マックイーンさんのこと、何卒よろしくお願いします」
「・・・わかった」
バタン。
二人が出て行って静かになった部屋内で、一つため息をついて、俺は電話を取った。
待ってろ、なにがなんでも治してやる。
トウカイテイオー、メジロマックイーン、二人共だ・・・・!

『スキンケアは欠かしていませんから』

「サークル『アケルナル』。
トレセン学園に籍を置く1サークルだが、出走ウマ娘を送り出すのは1年と28日ぶり。
ウマ娘たちに度を超えたスパルタ訓練を施したことで有名だ。
25日前に新しいトレーナーが着任してこれが初のサークル復帰戦。
いろいろな意味で有名なこのサークルの第一歩、たかがメイクデビュー戦とはいえ業界人の注目の的になっている」
「どうした急に」
「今回レースに出るのはナイスネイチャ。
正直無名と言っていい、際立った特徴のないウマ娘。
試走レースでは中―長距離を主に練習していて、先行、差しどちらでもこなす器用さを持っている。
この大事な初戦を任されたということは、トレーナーからの信頼が厚いと見るべきだろうが・・・。
俺なら、身体能力を評価してまずオグリキャップで初戦を取りに行く。
度胸のあるウオッカで勢いづけるのもいい。
今回はメイクデビュー戦だというのに、割と粒ぞろいのレースだ。
甘く見ると苦いスタートになる。
そもそも新トレーナーが着任してまだ一月も経っていないんだ。
今は時期をずらしてでもしっかり土台を作ることが大事だと思うんだけどな」
「なぜまだデビューもしていない選手まで把握しているんだ。
つまり、ナイスネイチャの勝ち目は薄いと見ているのか」
「それ聞いちゃう?・今日は幼年学校で地区別レース優勝ウマ娘が出るんだぞ」
「だな、悪い」
観客たちの無責任な発言が、競バ場内に飛び交う。

なるほど、確かにこのサークル最初の一戦目。
ここでつまづけば、やはりアケルナルなど大したことがないと思われるだろう。
新しいトレーナーは育成を誤ったと。
だが、そんな世間の評価などどうでもいい。
メイクデビュー戦？幼年学校地区別レース優勝ウマ娘？
笑わせてくれる。
「聞こえるか、ナイスネイチャ。
解説も、観客も、俺達に大した期待はしていないようだ。
幼年学校では無名だったと。中等部に入ってからも目立った成績は残せていないと」
「・・・はい」
「自分たちで君が走ったところを見たわけでもないのに知ったようなことを言う。
事前に配られた資料だけで判断しているな。
いったいパドックでなにを見ていたのか。
上腕二頭筋から大胸筋にかけてピンと通り、トモの色艶張り、肌のコンディションも申し分ない」
「ふん、あれからスキンケアは欠かしていませんから」
「この業界ではよく『たかがデビュー戦、されどデビュー戦』と言う。
最初が肝心、油断するなという戒めだ。
確かに下バ評では圧倒的優勢であったウマ娘が、このデビュー戦で負けることは往々にしてある。
それはなぜか。周りがみんなほとんど素人同然だからだ。
ある程度慣れてくれれば、周りとの距離感をうまく掴んで全力で走っていても接触することはそうない。
だがこいつらは違う。全力で走ることばかり考えて周りが見えていない。
だから平気で周りを無意識に妨害するし、団子のように固まって自ら怪我をしやすい状況を作る。
ナイスネイチャ、俺は君の脚質は差し向きだと言ったな。

だがこのレースに限って言おう。
最初っからぶっ飛ばして逃げきれ。
こんなのはナイスネイチャにとって『たかがデビュー戦』だと、わからせてやるんだ。
できるな？」
「このネイチャさんに、まっかせなさい！
ぶっちぎって来てやるわ！」
「よし、行ってこい！」
「はい！」
ナイスネイチャがゲートに向かう。
全身に生命力がみなぎっている。
コンディション、闘志、申し分ない。
『さあ、各ウマ娘ゲートに入りました。
やはり注目は地区別優勝者の彼女でしょう。
親御さんも優秀なウマ娘とトレーナーでした。
幼いころから訓練してきて、堂々とした佇まいです』
『私も非常に注目しているウマ娘です。
他のウマ娘を見渡しても、一回り格上のポテンシャルですね』
『サークル【アケルナル】からもナイスネイチャが参戦しています。
こちらのサークルからウマ娘が出るのは一年前の菊花賞以来になりますね』
『ぜひ悔いのないレースにしてほしいものです』
まったく期待していないのがよく分かる実況と解説だ。
まあたかがメイクデビューの実況解説、そんなもんだろう。
こいつらにはウマ娘の表層しか見えていない。
だがまあ、この逆風はナイスネイチャにはちょうどいい。
あいつ、褒めすぎるとたまに調子を崩すことがあるからな。
そこが可愛いんだが。
ああ、褒めちぎりたい。
顔をまっかにしてあのツインテで顔を隠す仕草がたまらない。
冷蔵庫の余り物でチャーハンとか作ってほしい。

商店街でじじばばに一緒に冷やかされたい。
違う、そうじゃない。レースに集中せねば。
もうすぐ出走だ。
ネイチャの顔を見ると、よく集中している。
そう、これだ。これなのだ。
『コンセントレーション』
俺がたづなさんを引き入れた理由の一つだ。
レース出走直後、特に短距離やマイルにとってスターティングはとても重要だ。
出だしですべてが決まってしまうレースもある。
それをたづなさんはよく知っている。
スターティングはフィジカルよりも、メンタルの要素が大きい。
ゲートに入ってからのわずか数秒で頭の中をレースだけにする。
本来、人に教わったからといってすぐできることじゃない。
たづなさんは、ウマ娘のメンタルをよく熟知しているようだ。
それぞれの子に合った集中する方法で教えてくれた。
彼女には感謝しかない。
俺も5回に渡り、一緒に飲みに行ったり映画を見たりした甲斐があったというものだ。
俺の諭吉は無駄ではなかった。
キタサトやサポーターのみんなの機嫌を損ねた価値はあった。
『さあ、まもなく出走です。
ゲートが開いた！真っ先に飛び出たのは・・・2番ナイスネイチャ！
すばらしいスタートです。
他のウマ娘たちは出遅れているようですね』
『いえ、そこまで出遅れているわけではないですよ。
これはナイスネイチャのスタートがよかっただけに、比較して遅れているように見えるだけでしょう。
しっかりとスターティングの練習を積んできていたように思えます』

『なるほど。しかしこちらは２０００ｍの中距離、ここからが長くなります。
　果たしてこのリードを守ることができるのか』
『彼女の脚質から言って、ほどほどでトップは明け渡すのではないでしょうか』
『はい・・・いえ、ナイスネイチャ独走しています。
　中距離のメイクデビュー戦とはまったく思えないペースで走っています』
『掛かっているかもしれません。一息つけるといいのですが』
『他のウマ娘は固まっているようです。内側を走る５番、４番は窮屈そうですね』
『デビュー戦ではペースがわからないから、周囲に合わせようとしてしまうんですね。
　よく見られる光景です』
『おおっと、７番と５番が軽く接触したか。
　ふらついたように見えます』
『これもメイクデビュー戦の風物詩ですね。
　怪我をしていないといいのですが』
『さあ、後ろの集団をどこ吹く風とトップを独走するナイスネイチャ。
　まったく脚色が衰える気配は見えません』
『これは・・・自然体で走っているように見えます。
　表情にも余裕がありますね。
　この速度、この距離で走ることに慣れているようです』
『なるほど、つまりこれは予定通りということでしょうか。
　トップを維持するどころか、ぐんぐんと差を広げていく２番ナイスネイチャ。
　レースも大詰め。最終コーナーを折り返す。
　もはや彼女を止めるものは誰もいない！
　速い、速い！もはや独走状態だ！
　残り２００を切った！後ろには誰もいないぞ、ナイスネイチャ！
　余裕を持って最後の直線を駆け抜ける！

今、ゴール！
勝ったのは2番ナイスネイチャ！
圧倒的な走りを見せてくれました！
サークル【アケルナル】の第一戦として素晴らしいレースとなりました！』
『いやー・・・すばらしいウマ娘が出てきました。
彼女はすでにデビュー戦の枠組みにはいないように見えますね。
これからが非常に楽しみです』
うむ、手のひら返しも見事なものだ。
まあほとんど情報などないメイクデビュー戦ではよくあることだけどな。
俺も最初は自信を持って送り出したウマ娘がメイクデビュー戦で躓いたりしたもんだ。
慰めるのに苦労した覚えがある。
走り終えたナイスネイチャが、こちらに歩いてきた。
「・・・お疲れ、ナイスネ」
「お疲れ様でした！ナイスネイチャさん。
練習通り、すばらしいコーナーリングでしたね！」
「独走してからも堂々とした走りやったなー。
ジブン、差しや先行だけやなく逃げでもいけるんちゃう？」
「はい、このスポーツドリンクを飲んでください。
ウイニングライブまで少し時間がありますから、体を冷やさないようにウインドブレーカーを羽織っておいてくださいね。」
「あ、ありがとうございます！
みなさんのトレーニングのおかげです！」
「いえいえ、ネイチャさんががんばったからですよ」
俺の前をこれみよがしに遮り、ナイスネイチャをねぎらうサポーターのみんな。
・・・ちっきしょおおおお！
そんなに全力で阻止しなくてもいいだろうよおおおお！
確かに距離を取るとは言った！

しかし、俺トレーナーぞ？
レースで1着を取ったんぞ？
少しくらいねぎらったって理事長も咎めんだろうよおお！
と泣き叫びたかったがぐっとこらえた。
みんなが俺のためにやってくれているのはわかっているのだ・・・。
灰家トレーナーはクールに去るぜ。
すっとその場を離れようとしたところだった。
「あ、トレーナーさん！」
背中に向けて、ナイスネイチャから声がかかった。
「・・・なんだ」
「あの、おかげで一着取りました！
まさかこんなに早くレースに出て、すぐに1着になれるなんて思ってなくて・・・。
あのとき、トレーナーが私に素質があるって言ってくれたから！」
「何を言っている」
「え・・・？」
「君の素質はこんなものじゃない。
たかがデビュー戦で勝ったからといって満足しないでくれ。
君ならもっともっと上の舞台で、名だたる強豪と渡り合える。
これはまだ、始まりに過ぎないんだ」
「は、はい」
う、いかん。
これじゃ少し突き放しすぎではないか？
くそ、昔なら思い切りハグして一緒に泣いて喜んだものだが・・・。
「・・・とはいえ、レースで1着を取るというのは言うほど簡単じゃないのはわかっている、つもりだ。
だから今日のところはしっかり喜んで、ウイニングライブを楽しみ、明日につなげてくれ」
「はい！ありがとうございました！」
「うむ。お疲れ様」
ふう、こんなものか。

適切な距離感が難しい・・・。
ナイスネイチャがウイニングライブの舞台へと歩いていくのを見て、普段の鉄仮面を少し緩めると、スーパークリークがこちらに歩いてくるのが見えた。
「トレーナーもお疲れさまでした」
「・・・俺は何もしていない。
トレーニングやケアは君たちに任せていたし、走ったのはナイスネイチャだ」
「ふふ、そうですね。
その距離感を保つ姿勢もだいぶ板についてきたのではないですか？」
「まあ、な。常に演じるつもりでいればなんとかなる。」
「疲れたら、またいいこいいこしてあげますからね」
「うむ、ぜひ頼む（迫真）」
「ところで、今日はアレはなさらないのですか？」
「アレ、とは・・・」
見ると、スーパークリークは４本のサイリウムを俺に差し出してきた。
「久しぶりに見たいなぁと思いまして。
サポーターみんなですよ？」
「・・・いや、アレやったら距離感もなにもぶち壊しだろ」
そう言って、サイリウムを1本だけ受け取った。
「あら、残念。ふふ」
「さあ、俺達もナイスネイチャのウイニングライブを特等席で見よう」
「ええ、お供します」
たとえ全身で喜びを表現できなくても、ナイスネイチャを応援したい。
本当に、よくがんばってくれた。
泣きそうになるのをこらえて、俺はサイリウムを振った。
『さあ、1着となったナイスネイチャがセンターを務めます。
曲はおなじみ【Ｍａｋｅ　ｄｅｂｕｔ！】』

『証拠なんていりません』

『最終コーナー、折り返し回ってきたのはゼンノロブロイ！
しかしウオッカが大外から猛烈な追い上げを見せる！
中盤まで脚をためていたのか、ぐんぐんと前との距離を詰めていく！
あっという間に８番からトップへ躍り出た！
直線に入ってもその脚は衰えない！
二番手との距離を更に開いて、今一着でゴール!!』
『ビワハヤヒデ、中盤から飛ばす飛ばす！
まるで他のウマ娘を子供扱いだー！
その体格に見合ったスピード、スタミナ、パワーを持ちあわせていた！
ＢＮＷの一角ビワハヤヒデ、ここでその本領を発揮してきた！
これからのレースが非常に楽しみです！』
『芦毛をなびかせて、内角からオグリキャップが食い込んできた！
せまい隊列をえぐりこむようにかわし、前へと駆け上がる！
爆発的な脚力だ！
これが本当にデビュー戦なのか！
一着はオグリキャップ、オグリキャップです！
これでサークル【アケルナル】の選手、全員がメイクデビュー戦で圧倒的な勝利を刻みつけました！』
テレビでは『復活の名門サークル！』という銘を打って特集が組まれていた。
いくらメイクデビュー戦とはいえ、安定して勝つことは難しい。
初勝利を刻むまで、何ヶ月も要するウマ娘もいる。
勝利できず、夢を諦め去っていくウマ娘もいる。
それを考えると、我がサークルながらなかなかの好成績を収めたものだ。
こうして実績を積み重ねて、ようやくお目当ての相手にお目通りが叶った。

「・・・それで、最近話題のサークルのトレーナーが、走ることの叶わない元競争ウマ娘になにか御用ですの？」
目の前にいるのは、故障した足を固定したメジロマックイーンだ。
かつては年代最強のステイヤーとして名を馳せた彼女も、故障には勝てなかった。
凛とした空気も、今は弱々しく感じる。
「自己紹介がいらないようで手間が省ける。
メジロ家のご令嬢とこうして顔を合わせることができて光栄だな。
半年前の天皇賞（春）は実に見事なレース展開だった。
鍛えあげた筋力と、肺活量、ペース配分。レースを見るだけでどれだけ準備してきたか伝わってきたほどだ」
「それはどうも。しかし、ご存知でしょうけどもうあの頃のように走ることはできませんの。
勧誘でしたら意味がありませんわ」
「ふむ、それは残念だ。
うちのサークルでぜひもう一度、君の長距離戦を屈強に駆ける姿を見てみたいと思っているのだが」
「・・・世間話でもしに来たの？
私もこう見えてやることはありますから。
執事、お客様がお帰りですわ」
「そのやることというのはリハビリかな？
まだ競争ウマ娘への復帰を諦めていないと見える」
「一人で歩けないようでは不便ですからね。
せめて日常生活に支障のない程度には回復しようとしているだけですわ」
「歩けるようになるだけで満足なのか？
メジロ家のご令嬢ともあろう者がずいぶん慎ましいことだ」
キッと目を釣り上げるマックイーン。
闘志はいまだ衰えてはいない。
「もう一度、君が走る姿が見たい。
集団の先頭を、その銀髪をなびかせて颯爽と駆け抜ける姿。

つらい長距離を、内心では歯を食いしばっているだろうに、すました顔をしてゴールを駆け抜けていた。
何年も積み重ねてきた鍛錬の日々を、その苦労を、これで終わらせてしまうのか」
「・・・観客はいつも無責任なものですね。
走れないものを走れという。追いつけ、逃げ切れ、ただ客席から大声で叫ぶだけ。
私達ウマ娘は、すべてのトレーニングと意地をかけて最終直線を駆けているの。
走ることをやめることが、一体どれだけつらいことなのか・・・あなたなんかにわかるものですか・・・！」
怒気を孕んだ声をにじませる。
「走れるなら走りたい。そう捉えて構わないかな」
「当然でしょう。
でも、それができないから・・・」
「走れる」
「・・・は？」
一瞬、令嬢にあるまじきぽかんとした表情を浮かべるマックイーン。
可愛い。
「走れるようになると言っているんだ。
君さえ望めばもう一度・・・ターフの上を、一年前のように」
「なにをバカなことを・・・」
「繋靭帯炎、なるほど厄介な病気を患ったものだ。
外科治療、内科治療、どちらにせよ完治が難しい。
この病気で何人ものウマ娘がターフを去っていった。
かつて俺のサークルにもその病気にかかった子がいたよ」
「それなら、わかるでしょう。
この病気になってしまえば、一部の例外を除いて復帰は絶望的。
私は発症からだいぶ経ってしまって、炎症も進んでいます。
うちの主治医とは別に、セカンドオピニオンも行いましたが同様の

答えが返ってきました。
競争ウマ娘の道は諦めろと」
「アドマイヤベガ、というウマ娘を知っているかな」
「・・・ええ、ダービーウマ娘ですもの。
一時期故障によりレースを休んでいましたが、今では復帰して勝ち星をあげていますわね。
噂では繋靱帯炎を発症したのではないかと言われていましたが、あれは」
「あれは君と同じく左脚の繋靱帯炎だった。
医者からは復帰は絶望的だと言われていた。
菊花賞で敗北し、次の宝塚記念に向けて調整をしていたところでの発覚だったな。
悔しさのあまりその場で足を折りかねないほど思いつめていた」
「・・・・・」
「当時は俺も若くて、死に物狂いで治療法を探した。
効果が少しでもあると思われる方法はなんでも試した。
治るかどうかもわからない方法を、来る日も来る日も。
ベガの執念がなければ、おそらく途中で諦めていただろう。」
「ほ、本当に・・・繋靱帯炎を治したというんですか・・・」
震えた声で、手元を見つめるマックイーン。
可能性はないと思っていたところにうまい話が転がってきたのだ。
信じられないのも無理は無い。
「絶対に治せる、とは俺も言い切れない。
だが実例があるのは確かだな。」
「しょ、証拠は・・・」
言いかけて、振り切るように言葉を続けた。
「いえ、証拠なんていりません。
治る可能性があるというのなら、私はそれを信じて突き進むまでです。
きっと、アドマイヤベガがそうであったように」
いい目をしている。

気高く、覚悟を持った目だ。
「つらいリハビリになるぞ」
「覚悟の上です。
どんな辛いリハビリだろうとやり遂げてみせます」
その言葉が聞きたかった。
「よし、それじゃあ二人共はいってきてくれ」
俺は外で待機していてもらった二人を呼んだ。

「この人達は・・・」
「一人は知っているだろうな。彼女がアドマイヤベガだ。
証拠というのであれば、生き証人といえる治療の実例だ」
「はじめまして、マックイーン。
同じ病気になった者同士、治療を手伝わせてもらうわ。
トレーナーから頼まれたよしみもあるしね」
「ありがとうございます。
競争ウマ娘として忙しいでしょうに・・・心から御礼申し上げますわ」
「そして、もう一人は鍼師の先生だ。
知る人ぞ知る名医でな。
みためは胡散臭いが、腕は確かだ」
「ほっほっほ・・・失礼なやつじゃな。
まあ儂の鍼だけで治るわけではないが、治療の手助けにはなろう・・・」
「お願いします。
治る可能性があるのであれば、泣き言は言いません」
「今日は二人の面通しだ。
本格的な治療は明日から行う。
鍼治療と内服薬で炎症を抑えて、治まってきた頃合いを見て外科治療をする。
スケジュールはこの工程表にまとめてあるから、今日中に読んでおいてくれ。」

「こ、このびっしりと書き込まれたものが私のスケジュールですの・・・？
　お願いするかどうかもわからなかったのに、こんなものを」
「やるかどうか決まってから作っては遅いからな。
　まあ不要になっても紙が無駄になるだけの話だ」
「なぜ、赤の他人である私にここまで・・・」
「言っただろう。
　君のターフで走る姿がもう一度見たいと。
　そのためなら、これくらいは安いもんだ」
　あとはダイヤに頼まれたのも大きいが・・・。
「・・・・ありがとう、ございます。
　この恩はきっと・・・」
「恩というほどのものではないが、もし完治したら頼みたいことがある。
　うちのサークルにトウカイテイオーがいるのは知っているな」
「・・・はい、よく存じてますわ」
「あいつが未だに燻ぶってるもんでな。
　同期のよしみで、ケツを叩いてやってくれ。
　なにG1レースを2つ3つも取ればあいつも火が付くだろう」
「ふふふ・・・簡単に言ってくれますわね。
　でも、望むところですわ。言われずとも」
「その意気だ。それじゃあまた明日、朝9時頃に来る」
「お待ちしていますわ」
　そう言って、俺は応接間を出た。
　これでダイヤにようやくいい報告ができるな。
　あれから毎日三回はマックイーンの治療はまだかまだかとうるさかったからな・・・。
　しばらく歩くと、玄関の前で一人の婦人が待っていた。
「お・・・？これはこれは、メジロ家の大奥様ではありませんか」
「その様子だと、マックイーンは治療を受け入れたようですね？」
「ええ、なんとか。

私のような得体の知れない1トレーナーを会わせていただいたおかげですよ」
「謙遜が過ぎますわね。
トレセン学園ではあまり名前が知られていませんが、企業サークル内ではとても有名ですよ。
いろいろな意味で」
「ははは、手厳しいですね。
これからこちらに伺うことも多くなりますので、お手柔らかにお願いします」
「もちろんです。
私の孫娘のこと・・・どうぞ、よろしくお願いします」
「・・・はい、必ず。私も全身全霊で治療に取り組みます」
「それでは、また」
「はい」
ふう・・・緊張するな。
偉い人と会うのは久しぶりだったから失礼がなかったか不安だ。
コネという意味ではこれ以上ないかもしれないが、そんなつもりで会ってたら即見透かされそうだな・・・。
「それでは私も今日はこれで失礼します。
ところで、トレーナーはいつ前の厩舎に戻ってきてくれるんです？」
アドマイヤベガから唐突に言われた。
「いや追い出された手前戻ることはできそうにないんだが・・・」
「トレーナーを追い出した無能管理職だったらもう総スカンされていないから戻れると思いますけど」
「え、そうなの？
しかし、理事長に拾ってもらった手前もあるしな・・・」
「じゃあ私がトレセン学園に入園するしかないかしら」
「ははは、５年おそグホッ」
「いつも一言多いんですよ、トレーナーは！
それじゃあまた！」

ウマ娘の膂力でツッコミは命に関わるぞ・・・。
「ウマ娘と仲が良いのは相変わらずじゃなぁ。
儂も今日はこれくらいで帰るぞ」
「ええ、忙しいところ来ていただいてありがとうございます。
また一杯やりながら、ウマ娘について語り合いましょう」
「ほっほっほ、君の新しいサークルの子たちの話であれば、いい肴になりそうじゃ」
「ところで先生、お弟子さんの暴走はどうにかなりませんか。
突然ふらっと現れては新しく考えた治療を闇雲に施して去って行くと私にも苦情が来ているんですが・・・・」
「あれは自称弟子じゃと何度も・・・」
この先生とはかれこれ二年の付き合いになるが、趣味が非常に合うので仕事は抜きにしても仲良くしている。
いつかたづなさんも連れて三人で飲んでみたいものだ。